

## 京都商人高畠勘兵衛による対外情報の入手と考察

— 『青菰雜誌』の天保改革期記事から見た —

土井 康 弘

### 1 はじめに

こんにち我々は、研究の蓄積により形成された見解をもつて、歴史的事象を把握していると思われる。すなわち、これらの歴史的事象に対する我々の見解は、その時代の史料にもとづいて得られたものではあるが、同時代に生きた人物のものではなく、後代の研究成果によっている場合も多い。それゆえ、研究の進展により、定説が覆ることも少なくあるまい。とりわけ、歴史的事象についての見解を述べた同時代の史料が見出されたときに、その

可能性は高くなる。

このような可能性を有する史料として、『青菰雜誌』（国立国会図書館所蔵 請求記号二四〇—一）の存在を知る人は少ないと思われる。この史料は、江戸中期から幕末に、京都「富小路通二条下ル俵屋町」<sup>1</sup>に住んだ、山陵研究で知られる商人高畠勘兵衛（寛政四（一七九二）年二月（安政六（一八五九）年十二月四日）<sup>2</sup>により作成されたものである<sup>3</sup>。

高畠勘兵衛は、名を敬宇、字を莊肅、青菰老人と号した。高畠家は備前国常山城主小笠原市正貞政を祖とする。貞政は落去後、備中国都宇郡鶴崎に住し、その後高畠と改姓した。八、九代後に京都に移って商人となったが、こ

れが初代塩屋勘兵衛（文政三（一八一〇）年三月七日没、享年五十六）である。初代勘兵衛は文才のあった人物らしいが、その長男が勘兵衛莊肅である。勘兵衛莊肅は早くから仏学、漢学、国学などを修めたが、ために家業に従事する気持ち薄く、家は弟に継がせ、生涯独身であった。また勤皇の志が篤く、山陵の荒廢を憂い、弘化三（一八四六）年頃より、同志と諸陵の研究を行い、『山陵大全』を著す。さらに、安政元（一八五四）年、三条実万、平塚瓢齋らとともに山陵会を組織し活動した。勘兵衛莊肅自身の後裔はいない。同人の蔵書は、死後遺言により建仁寺に寄贈され、弟に譲った店舗は、大正十五（一九二六）年の時点では、高畑商店として木屋町に現存していたという。

こうした、学問に人生を賭けたような高島勘兵衛の残した『青菰雜誌』は、はじめは、京都を中心とする関西方面の触書を留めるために作成されたようだが、天保十三（一八四二）年からは、「情報録」兼「日記」、さらには情報に関わるコメントが付されるようになり、安政六年までに、自作の目録を合わせ、九十二冊が作成されるに至っている。この『青菰雜誌』が、高島の生きた時代の世相を鮮やかに映し出し、歴史を紐解く者にとって、実にありがたい史料であることは、嘉永六（一八五三）年の風説を集めた同書第四拾四にある、次の高島の弁を紹介す

れば充分であらう。

当六月爾來俄二異国もの、書籍流行、全躰近來清国アヘン始末より以後なんとなく異国之書徘徊すといへとも、別してイギリス浦賀渡來西洋書行わる、ヲ、六六洲之地理書并本朝国絵図段々委敷ありしか、当丑六月北亞墨利加渡來以後、一際異国ニ拘わる艸紙、雜書、漂流記ニ至迄銘々ニ写し取事流行、勿論書房何れも心掛るといへとも、業躰之ものハ兼て被仰渡重きか故、後難を恐れて内々少々宛なぶれり、素人ハ一向構ひなく其有志のもの共互ニ取かへく写し取なり

今日の通説では、幕末という内憂外患の時代を生き抜くため、民衆の間でもネットワークをつくり、時事に涉る情報を効率よく入手しようとしたとされる。アヘン戦争、イギリス人ゴルドンの浦賀來航、そしてペリーの來航がその契機となったことが、同時代人である高島の言葉から裏付けられるわけである。同人がこれに続いて述べた次の弁からは、現代に生きる我々が、高島にすべて見透かされている気がしてならない。

予思へらく、弑百年も経たる後取出し見ん者ハ嘸珍書とて愛翫すへけん、皆実事日記なれ者なり

同人は、『青菰雜誌』が後年貴重な史料となることを予見していたわけだが、なるほど、『青菰雜誌』を読み進めるほどに、高島が収集した情報ならびに同人の意見が、

高い価値を持つことを実感させられるのである。特に、嘉永七年の段階で関係書を五百巻も集めていたとする、『青菰雑誌』第四拾九にある高菰の弁は、同人が対外関係については一家言を持つていたことを、如実に物語っている。

子町人の身として近來諸蕃之為体、且和蘭例年之別風説を所々に凝て乞ひ内見し、其外同志同友の風説を初メ他の風分書をかり得、或者地理風水天文地理の図、又六大洲を初しめ別して者本朝海内之図、又異邦二拘る之書印板写本共凡五百巻にも及んか

もつとも、この高菰の考えは為政者のものではなく、幕藩体制下において、政策決定に影響を及ぼすことはなかったと考えられる。しかしながら、『青菰雑誌』には、高菰が京都の商人や僧侶、公家の奉公人、さらには京都に屋敷を構える諸藩の人物、幕府の役人などからも、機密性の高い情報を手に入れていることが散見する。このような活動は、一商人の域を超越するものであるといえよう。さらにいえば、高菰は、入手した情報に自らの弁を附すにあたり、情報提供者らと対談した様子も垣間見え、これらをすべて信じるわけにはいくまいが、『青菰雑誌』の分析により、同時代の知識人の見解を知ることができると思われる。

むろん、『青菰雑誌』は九十二冊にも渉る大部な史料ゆ

え、全体を網羅的に検討することは困難である。そのため、前述の高菰の弁にもあるように、アヘン戦争、イギリス人ゴルドンの浦賀来航、ペリー来航等の事件の発生により情報収集活動が活性化したわけであるから、筆者は、これらの事件と事件をつなぐ期間に区切って検討することにした。これによつて、高菰勘兵衛の時代感覚も見出すことができると考えられる。ただし、アヘン戦争からゴルドンの浦賀来航までと一概にいつても、この間の弘化二年二月、水野忠邦を病免することにより、幕府の政権が完全に阿部正弘へと転換した時期であることに注目しないわけにはいかない。今後何らかの形でその変換の差異を検討するための準備として、水野政権下での高菰の情報収集の実態を明らかにしておく必要があると考えられる。

本稿は、幕末において、どのような対外情報に一般民衆が関心を抱いていたかについて明らかにする試みの一助として、京都商人高菰勘兵衛の残した『青菰雑誌』を、天保改革期にあたる、天保十二（一八四一）年から天保十五（一八四四）年まで分析することを目的とする。その際、高菰の、同時代の対外情報収集の動向について明らかにし、これに対して同人がどのような感慨を抱いていたかを考察したい。

## 2 高島勘兵衛のアヘン戦争関連情報の入手

2—1 天保十三年七月までの高島のアヘン戦争に関する知識

高島勘兵衛が、対外関係について、精確にいつ頃から興味を持ちはじめたかは判らない。しかしながら、万巻の書物を収集していた高島は、「至天保十三壬寅秋 京町触二卷之内上」である『青菰雜誌』第拾巻以降、同書に對外情報に記載し、自身の感慨を述べるようになっていたので、日付の記載などから、同人の思考の変遷を見ることも可能である。

高島が『青菰雜誌』に初めて記した、対外情報についての見解は、第拾巻に記されているアヘン戦争関連情報についてである。高島は、天保十三年前半にはアヘン戦争の様子を詳細には知り得ておらず、次のように、六月二十七日に入津したオランダ船により、関連情報もたらされたことを知るのみである。

天保壬寅六月廿七日入津蘭船御用御詔之内、航海家曆二冊、咬啣吧曆二冊持渡ル、紅毛風説二者広東いよくイキリス江乗取られイキリス人追々広東ヲ領スル趣也

七月二十三日になると、高島は、天保十三年の「オランダ風説書」に記されている内容を風聞で知り、『青菰雜誌』第拾巻に、次のように述べる。

紅毛風説書の内ニ、清朝トエケレス国ト之戦ハ三ヶ年前より風説有て、元来アヘン田葉粉之一件より事起り追々手広ニなり、菟角エケレス国の方手強く竟ニ本合戦となり、尤広東の地の事ニ而北京又ハ本朝渡海出帆之浜サ浦ハ広東迄之道法、本朝の里程にして凡五六百里も間の有土地也、去共広東ハ唐国第一の大交易、諸蛮国ハ入津の諸舟夥數大都会の所故、朝都ニ而も深く心配スル様子也

また、この風説書の内容として、高島は、次のようにイギリスの中国支配について考察する。

実ハ内実説ニハ最早広東地方過半エケレスニ切り取られたり共、又ハ広東ハ東北へ打廻したる海岸サ浦近く迄之海嶋十八九ヶ所エケレス人ニ被乗取、其中ニハ余程大キ成嶋有て皆々上陸シエケレス人住込追々合戦の手段調略致ス趣

中国がこのような情況に陥れば、日本へ渡海する同国船に影響が出ることになるのは必至であろう。高島は、このアヘン戦争の影響で同年夏には中国船が来航しないのではないかとする世説を、次のように伝えている。

然ル故当夏之唐方今ニ入津不致、毎も白露迄之事成ル

二、最早七月下旬迄二無渡海ハ今年ハ欠船ト見込沙汰  
有

このように高島が考えたのは、どうやら執政を担う幕府  
関係者の見解に関する情報を手入していたからで、七月  
二十七日、アヘン戦争の影響を憂えた幕府が、自国日本  
への影響を鑑み、次のように九州長崎への海防の強化を  
構想するのではないかとこの風説を記すのである。

けふ七月廿二三日頃の風説ニ而ハエケレス之騒動愈六  
ヶ敷、清朝殊之外心痛之趣、猶此上の様子次第本朝に  
も九州長崎を初しめ、海妨の御手当も可有歟之内説有

2 | 2 天保十三年八月上旬大坂から伝わったアヘン

### 戦争の顛末

このように、アヘン戦争の影響により中国船が入津せず、  
また幕府が中国と同じ轍を踏まないように海防を強化し  
ようとする風説が流れるなか、天保十三年六月十九日に  
入津したオランダによる風説書が、八月上旬に内々に大  
坂に伝わり、高島の耳にも届くことになる。

ただし、高島のもとに入ってきた情報は、「オランダ風  
説書」の内容だけではなかった。かねてより小国オラン  
ダは人が足りないので、「エケレス人又ハ天竺人或ハ所々  
国々之者を雇ひ入」ていたが、とりわけイギリスは隣国ゆ

え、多く雇い入れていたという。そして、この六月十九  
日に入津したオランダ船にもイギリス人が乗込んでおり、  
長崎に入津した上、オランダ人に頼んで長崎役所へ差し  
出してもらおうようにと、封書を差出してきたことは、波  
乱を巻き起こしたようである。

すなわち、翻訳されたオランダ人の口上書によれば、先  
年よりオランダは隣国イギリスと互いに不仲で故障が絶  
えず、いまだ快い関係ではないが、近年ようやく調停が  
なされ、この度長崎に入津するに際して、別紙を日本の  
役所に差出してくれるよう頼まれたという。またオラン  
ダ人は、イギリス人が何故日本へ別紙を差出したのかは  
わからないが、自国との訳柄もあるのであととの故障  
となるとして、オランダ側の書き添えをイギリス国の封  
書とともに差し出し、通詞が翻訳したのち長崎奉行のも  
とに差出すに至った。しかし、このイギリス国の封書の  
上書きには、漢字で「日本国長崎御奉行様」と認められ  
ており、これを見た長崎奉行は打ち驚き、開封すれば自  
身の責任が発生すると考えたのかそれをせず、オランダ  
人、イギリス人、そしてオランダ通詞を奉行所と呼び、  
奉行自ら通詞を介して尋問するに至った。

長崎奉行が、この差出した封書は誰に頼まれたのかと質  
問すると、イギリス人は、自国の国政を預かる頭人より  
渡され、長崎入津の上、オランダ側から差し上げてもら

うように申付られたと答える。再び長崎奉行が、どのような願いと仔細が認められているかと問えば、イギリス側は、自分たちは下賤の身であるので、どのようなことが認められているのか一切知らず、ただ日本に入津したらオランダ側から差出してもらえとだけ命じられた、というのみであった。

しかし、このようなイギリス側からの回答に、長崎奉行は、その内容がどのようなものであるか、ヒントでもよいかから開封せずは何としても知る必要があったのであろう。長崎奉行が何か心当たりはないかと問いかけるに至り、イギリス人は再度、自身が下賤の者であり委しきことはわからないとしながらも、次のように述べる。自国イギリスはアヘン戦争で中国と闘っているが、この問題はイギリスと中国とのものであり、中国から日本に救援を願われてもイギリスとしては迷惑なので、そのようなことをしないようにというものではなからうか、とするのである。

これを聞いた長崎奉行は驚愕し、このイギリス人に対する調書を添え、イギリス国からの封書を早飛脚で江戸に送り、伺いを求めるに至る。当然このような情報は、幕府側としては秘しておきたい事項であり、通詞にも厳しく口止めしたが、結局漏れてしまい、オランダの昨年残り荷物をこの春入札するにあたり大騒ぎとなったこと

を高島は伝える。

また、高島はこれに続けて、オランダから来た品物とその流通についての状況に加え、「八月三日出之急便二唐方入津之音信更二不聞」として、このまま唐船が入津しなければ、八月の蘭船の入札の景気も左右するというのである。そのため長崎では、唐方の風説をする者は入牢となるという触書が出て、何人も捕えられたが、嚴重に風説を差し止められたにもかかわらず、イギリスからの封書の願意、そして長崎奉行とイギリス人の問答までが洩れ聞こえるようになっていたことを高島は伝える。むしろその理由は、次の高島の弁から充分考察が可能である。商売に携わる人間にとって、情報の入手が死活問題であったことはいうまでもない。

右交易損益二抱ル事故、長崎荷主共銘々思ひくくこわく手帑二少し宛前段之模様を認め、急便二大坂表二而銘々懇意く江差登すを寄七合七老江猶長崎を登りし者之密々風説とを以て考ふる、此節の調子也

とりわけ高島は、イギリスとの戦争により唐船が入津していない現状が続けば、乾物類の相場が高く推移するのではなからうかとする風説を伝えている。幸い、昨年の冬に三艘、今年正月十一日に二艘、長崎に唐船が入津し、後者よりの情報として次のように記す。

すなわち、洋中は波が荒く、昨年の冬に出帆した二艘が

引き返し、一艘は台湾、一艘は「ふだ山」で風を待つていたが、その時に聞いた風説として、広東でイギリスとの戦争で清朝が負け、イギリス人が乱暴をはたらき清帝の逆鱗に触れ、清帝は自分が出張するというのを家臣がなだめ、日本でいう御三家に当たる人物に出張の手筈を調えさせたという。

中国人らは、長崎に向け出帆したのでその後の詳細は知らないとしながらも、「殊之外六ヶ敷相聞へ候風聞」を伝え、先に来た冬船三艘は荷役を早く済ませ出帆した、しかしながら、遅れて入津した春船の二艘は、前述したような次第で覚束ないから、自分たちは夏船が来たとき状況を聞いて安心して帰国したいと述べている。むろんそうなれば暫らくの滞在となるが、長崎奉行側は、例のないこととしてこれを認めなかつた。しかし、それでも春船の中国側は、出帆はするが速やかに帰国するには心許ないので、どこかへ乗り入れ船を繋ぐこともあるうから、いつもの倍の食料を積み込みたいとしてこれを許され、三月に泣く泣く長崎を出帆したという。そして、このような状況のもとで、高島は、夏に来るはずの唐船が欠船するのではなからうかとする噂を伝えるのである。

どうやら、このような中国の不利な戦況を、高島はイギリスの技術力によるものと考えていたようである。オランダの説として、次のように、イギリスの砲術に関わる

技術力が中国より高いことを、高島は熟知していたようである。

又蘭之説二者、当時エケレス国二者奇異成砲術を遣ひ凡十四五町斗も一時二飛行、何かなしに木二而も草二而も一面之火二成ル火炮を以清朝へ打かけ、如何成手段も先ツ其火不消時ハ軍立も合戦も軍術も行ひかたく、夫故先ツ此火炮を初しめに打かけく乗込故、清朝人手段なく困ル趣をいふ、是ハ蘭方之申立ル風分也といふ

## 2—3 天保十三年八月上旬から中旬のアヘン戦争情報

長崎に来航したオランダ人が伝えたアヘン戦争に関わる情報を、天保十三年八月上旬、高島は大坂から入手したわけだが、この後、精確な日時は欠くが、高島のもとに長崎関連の「密文」として、次のような情報もたらされる。

清朝浙江、寧波、別而広東ハ当春国王出張之節一戦ニ打負早クエケレス人広東を乗取、其上浙江并寧波ハ勿論諸嶋凡二十余嶋も被乗取、エケレス人之当時内心二者先ク清朝ハ大概我手ニ入りたりと思ふ様子也

また先に述べた、イギリス人から長崎奉行に内々に渡した封書というのは、同国に漂流した日本人七人のうち生

存している三人からのものであり、封書を長崎奉行に渡したオランダ側は、この内容を推量して、密かに通詞を介して長崎奉行に忠告したという。

すなわち、このイギリスに漂着した日本人からの封書は、イギリス人が日本のどこかに水を汲みに上がった時に、日本側が鉄砲で四、五人を射ち殺し、生存した者が帰国してこれを本国に伝えたことを述べていた。そして、イギリスは中国を獲得した上には日本も攻め取るつもりなので、母国日本に内々に注進したのだというのである。

これにより、高島はイギリスに対して警戒心を強めたであろうが、同人はイギリスが中国との戦に本腰を入れると想定するとともに、対馬藩が朝鮮より中国の情況を聞いているのではないかと思いをめぐらし、実説次第では九州と北国の諸大名に海防の手当を命じられるのではなからうかと考えるのである。また高島は、八月上旬から鉛が高くなったことを、諸家が火砲の手当を行っているためであると考察するとともに、提出された「オランダ別段風説書」について次のように伝える。

すなわち、「オランダ風説書」以後差出したアヘン戦争の顛末を述べた文の翻訳は美濃紙で四十枚余もあり、通詞らは他言を禁じられたにもかかわらず、長崎では「長崎表ハ何となく気辺穩ならずといふ也」として、市中の不穏な情況を高島は伝えるのである。

また日時を欠くが、天保十三年八月上旬頃、アヘン戦争の手当のため、川越藩が浦賀へ出張手当を仰せ付けられたとする風聞を高島は記しているから、全国の人々が少なからず日本にも影響が及ぶのではなからうかと考えるようになったと思われる。

#### 2—4 八月二十日に長崎から発信されたアヘン戦争 関連情報

天保十三年の高島にとつて、アヘン戦争の弊害が日本に及ぶのではないかとする考えは、いつも頭を擡げていたであろうが、イギリス人が琉球に來航したことに関わる情報を少々入手することになる。精確な日時は欠くが、『青孤雜誌』第拾壺で高島は、琉球に來航したイギリス人が乱妨し私財を奪ったが、かつて琉球に恩義があるから返却したとしている。またこれ以後高島は、長崎より八月二十二日に発信された文面が大坂で写し取られ、同所から同二十九日に発信され京都にもたらされた情報で、「エケレス一件荒方之書取」を入手して、次のように、さ  
らなるアヘン戦争の情報を知るに至る。<sup>20)</sup>

唐国戦争ハ実事ニ而蘓州、寧波辺も責取られ候趣、此節ハ左浦<sup>ササノ</sup>日本里數十五里斗も有之候故、定而左浦も及騒乱日本通商所ニ而者有問敷趣



また、アヘン戦争の実態を把握するためであろう、日本側が長崎の唐館に尋問した結果として、中国人が昨年日本へ渡来する際に、イギリス船に取り巻かれ蘇州へ乗り入れたことなどを、高島は知ることになる。そして、これらの情報は前述したオランダ側から入手したものと少しも相違なく、すべて割符を合わせたようである、と高島は考えるのである。さらにはこれらの情報について、長崎奉行から江戸へ掛け合いになった旨を伝えるが、幕府より九州十四ヶ国に次のような薪水給与令の通達があり、諸藩が国許へ伝えたことを記す。

自然エケレス船地方江参り候ハ、備方嚴重ニ致し候義者勿論、兼々打果候様申達し置候得共、一応来着之趣相尋薪水を乞候義ニ候へハ相あたへ無事ニ出帆為致可申候、自然手むかへ致義ニ候ハ、無用捨打果可申段、此外備方等嚴重ニ被仰渡候間、即日国々江早飛脚ヲ以右之旨掛合ニ相成候由ニ御座候

むろん外交の窓口である長崎にも、幕府はこの触れを流したが、高島は次のように記しているから、オランダ人を尋問した文面なども、九州十四ヶ国の間役に幕府側から伝えられたようである。

又両三日以前新古カピタン兩人被召出御尋之御趣意も有之、別文間役中江御達し之趣被仰渡候、右之通御座候

また、長崎から八月二十日に発信された書簡は、アヘン戦争について長崎唐館の者が語ったとする話を伝えている。この書簡は八月二十九日に写し取られ、同じく大坂から京都へもたらされたようである。

すなわち、長崎の唐館に昨丑年に渡来して居残った者が、これまでは自国の恥と思ひ憚っていたが、この年夏に來船した船が話し、委しくなってきたので最早包む必要もないとして、アヘン戦争の様子を少しづつ話しはじめたとしている。イギリスと戦った清朝は政治向きが良くなく、親王が広東に出張して火炮を打とうとしたが、広東人が夜のうちに葉をぬったため飛散し、自国の士を損じたという。またこれをイギリス人に付け込まれ大敗北を喫したという風説があるが、高島は、イギリスが使った「ボンベン」とかいふ火炮ハけしからぬ勢ひ剛猛成趣向と聞へ」とし、新兵器ボンベンについて次のように記す。

先火炮を筋違に空へ向、敵の陣或ハ城を見かけ何町何百間有といふ分量を測量して、先空へ向筋違ひに打上ぐれ者、其城陣中の真中の辺の空にて真直に下江落、土中七八尺もにへ込、暫すれ者火勢猛火四面ニ飛散言語同断の趣向といふ、其落たる時決而消す杯といふ様ニそばへハ近寄られず

短いながら要を得た説明であるが、続けて高島は、このボンベンに清朝人が大いに困っていることとともに、日

本には五、六年前にオランダから伝来し、「長崎年寄某」が製作する際に一挺の制作費用が千五百両もかかり、これを幕府に献上したという。当然この「長崎年寄某」は高島秋帆であろうが、同人が江戸徳丸ヶ原でボンベンの演習をする際に、長崎から運んだ荷物を、伏見から大津の間で見た者がいたことを高島は述べているから、天保十三年の段階で、この新兵器の存在を民衆の間で知る者がいたことがわかるのである。

また前述(2—3)の日本漂流民が長崎奉行に差出した文面にある、イギリス人が北国で水を取ろうとして上陸した際に三、四人が殺され、それを恨みに思い日本を狙うのではないかということを考えて、次のように触書の文面、つまり薪水給与令が発令されたと考察するのである。

既ニ当九月江戸各諸国への申渡し、京坂之内へ之触書之様子を以考ふれハ向後むさと手向ひも不致、外国人何之趣意有哉来意承り若薪水を乞ふ成ハ遣し、自然手向ひ等致スならてハ如法可致との触書之出し塩梅にてハ此証実事ならん哉、如何

以上のように、天保十三年九月頃から、高島の耳には、アヘン戦争の影響とそれに対する幕府や諸藩の行動が入ってきたわけだが、関西地域の町人らも、これと歩調を合わせた活動をするようになる。とりわけ、武器の製作

に関わる人物たちの動向を、高島は次のように述べ、忙殺されている状況を伝えている。

当春以来、泉州堺、江州国友、其外所々鉄炮鍛冶殊之外いそかしく諸家注文夥敷様子なり、且雑兵の具足なれとも京二而も鍛冶屋二而所々仰山こしらへ居るを幾等も見受る、此様子二而ハ諸武器職人嘸笑多ならん、公義も中々心配の時節に向ひ気配り多からん、愈国政油断ならず

高島の耳には、このアヘン戦争に連動した町人らの活動とともに、「九月節句同前後」関西近郊だけでなく、九州、北国、南海の諸大名が所領の手当を命じられたことなどが入り、分析を始める。

高島は、これまですべて武事を怠り勝ちであったが、このたび四海に関わる諸家領主一同が軍役を仰せ付けられた結果、手当が出来たとしているが、これら海防の触書は、朱印のある領地の神社には廻ったが、海に面していない京都では出なかつたことを伝えている。また、中国でのアヘン戦争の状況が深刻化していると考えたのである。唐方交易の諸商人が、冬に予定されている船が来舶しないだろうと、覚悟を決めている状況を伝えるのである。

清朝与エケレス戦争之風説益名高くなりて、当冬船迎も不来与本朝唐方交易之諸商人共皆覚悟有

むろん、この考えは、同人を含めた京坂一般の見解であったようである。このような悲観的考えは、情報が思わしいものでなかったから生まれたに相違なからう。高島が天保十三年十二月までに入手した対外関係の最新情報<sup>20</sup>が、十月に伏見に着いた琉球人が、薩摩まで来る途中、イギリス人雑兵の海賊行為に遭い、幕府に献上する品を奪われ薩摩で調べたとか、その後日本人の所持物を残らず戻したなどの風説であったことから窺えよう<sup>21</sup>。

しかしながら十二月二十二日、高島は思わぬ知らせを受けることになる。十二月六日に二艘、十五日に一艘、さらに十七日に一艘、合わせて四艘の中国船が長崎に入津したことを知り、「此舟之風分二而清国エケレス動きもさのミの事も無き様子也」と樂觀視するのである<sup>22</sup>。ただし高島は、この四艘の唐船が運んできた荷物が大坂にもたらされた際に、「当年二限り荷数者来らす」と、例年とは異なり当初荷物の明細書がもたらされなかったことを伝えている。そしてこの背景として、長崎で嚴重に取調べたこととの関連を考察するが、併せて、その理由は次のように異国の風聞が漏れないようにするためであるとすると説を伝える<sup>23</sup>。

異国騒動有る折柄、彼地之風分漏らさ、る為との趣向ともいふ説あり

加えて十二月上旬の風聞として、イギリス船が因州、但

馬、若州洋、さらには紀州、房州辺でも見られ、淀の城主稲葉丹後守が泉州浦の固めを言い付けられたことを高島は知るに至るが、注目すべきは、同人が、下田および羽田に新規に出来た奉行を、「廻船取締り并異国固メ」と位置づけたことである<sup>24</sup>。幕府による両奉行所の設置意図が国防強化策の一環であることを、高島は精確に把握していたといえよう。

## 2—5 天保十四年初頭における中国貿易の状況と国内の軍事活動

高島らの心配をよそに、天保十三年十二月に中国船は無事来航したわけだが、翌十四年三月上旬に始まった積荷の入札では、商人らの見込みより高いものであったようである。その理由は、これまで長崎で入札したのち荷物は残らず大坂に着いていたのだが、この度は三分の一が江戸に廻され、同地に新規に唐物荷物請人が出来たためである、と高島は考察する<sup>25</sup>。

江戸を保護するための方策であろうが、高島をはじめとする京坂の商人たちは、同地の経済の衰退を招くと考えたと思われる。またあわせて幕府は、この度の積荷の明細について、通常とは異なる取扱いをしていた。通常オランダ同様に、唐船は入津次第積荷物の明細書を長崎

奉行に差出し、その後会所の役人に渡され、早船で大坂へ注進するのだが、天保十三年末に来航した四艘の唐船が差出したと考えられる明細書は、長崎奉行の手元にあるのみで、天保十四年三月頃であろう、全くその内容は漏れてこないと高島はいう。

また幕府は、唐船四艘にはいつもより厳重な警固をつけて、荷物の分量が知られないようにしたため、大坂への注進はすぐに行われたものの、浪花の商人たちは為す術もないという。もともと長崎でも、目前にいる唐船を日々白眼視するのみで、その情報を知ることができず、ましてや中国本土の風説を知ることが当然できないという、なんともやりきれない気持ちであったようである。四方を嚴重に囲み、他の舟を寄せ付けないようにして、唐船から唐館へ荷物が次々と運ばれるなか、商人や会所に関わる里人は、丘岸より何とか遠望して、次のように涙ぐましい活動をするのである。

年々持渡之荷こしらへ、又荷のかつ好を詠め何品某にてもあらん、幾箇積出せし故凡何程之分量ならん杯へ内通致ス迄の事也  
提案の評論をして心得となし、銘々密々大坂根証文方

もつとも高島は、のちに天保十四年正月廿日頃「入津唐船の積品數」と分量が、長崎から表立つて大坂表へ伝わり、「此度持渡之代呂物ハ近年之品柄とハ格別宜敷也」と

記しているから、長崎商人をはじめ貿易関係者は、やはり三月中であろうか、その内実を知ることができたと思われる。しかしながら、「エケレス戦争之風分決れもれざると見へ更ニ何之沙汰もなし」ということで、アヘン戦争の状況については、高島のもとにはもたらされなかったようである。高島は、前年冬からその年の春にかけて入津した四艘が運んできた品物の入札が、三月上旬より始まったが、いずれも見込みよりかなり高く、そのため唐、蘭ともに、上方筋の葉種は高くなったことを伝えるのである。

唐船の来航による経済効果はともかく、天保十三年末から翌十四年初頭にかけて、日本国内での軍備に変化が表れる。高島は、二月中旬より丹後洋に異船が出没したことを述べているが、天保十四年五月から七月の間に武器が流行している、京都市中の鍛冶屋で「雑兵着の至て鹿相成小具束、又ハ鎧の下地金彫敷打こしらへ居るを往々見かけ」、少しずつであるが軍事活動がなされるようになったことを伝える。

大塩平八郎の乱でいったん武事に目が向いた時期もあったが、それ以後は奢侈な風流に流れ、そのために困窮するという不始末で、近年の参勤交代でも、諸侯歴々の「家来具束櫃」の中が空で、その例として、姫路家の江戸入りで具足櫃の蓋をとれば、無関係の物ばかりで武器な

ど全く入っていなかった、と高島の弁は厳しい。しかしながら、アヘン戦争や、日本に多くの異船が接近して行くことにより、幕府から手当を言い渡され、高島は次のように、天保十三年から少しではあるが武事が戻ってきたことを歓迎するのである。

昨年々御趣意、或者異国戦争の風分、且本朝所々海岸二異船の見ゆる杯といふて御手当被仰付し大名も有からハ、稍目をさまし年来打捨置し武器類の調らへも出来、夫々修覆新調又ハ古ひを綴り漸武家心出来しと見ゆ、可然事也

## 2—6 天保十五年におけるアヘン戦争情報に関する

### 考察

以上、天保十四年前半期までのアヘン戦争に関わる、高島の情報収集と分析状況を検討したが、次に同人が同じ問題を『青菰雜誌』に記すのは、天保十五年の情報を記した第拾九を待たねばならない。南京条約締結後、清人が漂着したイギリス人を殺したことにより、イギリスから清朝に天保十三年十月に送った書簡を高島は考察しているが、誤認はあるが、同人が併せて記した文面から、日本における異国船に対する政策について、その卓越した分析力を感じさせる。

すなわち、キリシタンを恐れて、徳川の初めより二百年の制度として、異国船が日本にやってきたら無差別に早速打払うことを諸家に伝えていたことは市民も知っているが、天保十二年に幕府がこの政策を転換して薪水給与令を出した理由を、今日通説となっているアヘン戦争の影響と考察しているのである。また、清国でのイギリス人殺害について情報を欲していたところ、長崎奉行が来船の清朝人に問い合わせた際の内容を知るに至ったようである。これにより高島は、清国とイギリスが再び戦闘状態に入ったことを知ったようだが、この清朝人が差し出した中に、イギリスと清朝との往復書簡があり、これを見た幕府側が「イギリス之文体尤なりとや被思召けん」と考えたのであろう、と高島は考察する。また、幕府が目的も糺さず、来航した外国人に対して焼捨を行っていることを、外国では不仁の国であると思われるのも道理であるとして、薪水給与令を発令したと述べている。

これまでの先行研究では、オランダからの情報を幕府が重視していたことが指摘されているが、中国側の情報も幕府が薪水給与令を出すに至る大きな原動力であったことを、この高島の弁により考察することができるのである。

次に高島が『青菰雜誌』に中国について情報を記すのは、天保十五年八月下旬から九月上旬ごろであり、次のよう

なものであった。<sup>⑧</sup>

イギリス国与清朝との戦争之始末ニ付、竟ニ和睦ニ成りしハ不得止広東をイギリス支配とセシ故、其勢ひ二つれ類ニ広東ニおゐて新艦之軍船を夥敷造り居る故、若日本をセむるにて哉なきかと当夏船の唐方々内々長崎奉行へ届ケしといふ風分も有

虚実の入り交じつた情報を入手したことがわかるが、それでも高島は、第一次アヘン戦争の発端に關しては、ほぼ正確に把握していたといえよう。それを示す根拠として、同人が天保十五年八月ころに記した文を、多少長くなが引いておきたい。<sup>⑩</sup>

唐国広東之湊ハ古来々外国通商之地ニ而諸外国之者渡海し來候、然るニ外国人之内インキリス人共、いつ頃よりか唐国之者へ阿片ニ而製し候煙草を進メ追々売弘メ、元來阿片煙之義ハ人吞て益なし、是を永く相用ひ候へハ自然と氣力弱く成、終ニハ人命をも損し行々ハ国之害にも可相成事を心附候人有之、近年一統制禁申渡有之候得共不相守族も有之候ニ付、猶又其段諸方々奏聞ニ及ひ、就中山東之文臣黃爵灌と申人、強而国害ニ相成候義ヲ申立候故弥以嚴敷相成候処、去春尚又大造之阿片持渡候ニ付、福建之文官林則余ト申人上使として広東へ罷越、右持渡り阿片式萬余箱不殘買上燒捨ニ致候以來、決而持渡り停止之趣申渡ニ相成候以後、

種々として願出候へ共許容無之候処、右インキリス人共始メ広東へ致住居候外国人共、以來通商不相成旨ニ而追払ニ相成候由、其後当六月寧波府之内定海県与所江四拾余艘之インキリス船渡海し、同八日鉄炮ヲ打合双方死傷有之、別而定海県之知県并総官兵討死致し終ニ一県インキリス人江奪ひ取られ候、然ル処六月廿四日インキリス船一艘左甫表へ渡來、双方ぶ鉄炮を以死傷等有之、引汐ニ連レ行方不相知候処、九月廿日頃インキリス国第三の王女精兵七八十人を卒シ、端舟ニ乗組寧波府之内余姚之海岸近く漕寄セ大筒式挺打懸ケ候処、其所淺沼故右大筒之余勢ニ而終ニインキリス船裂ケ自然与沈め候故、地方之土民共駈集り右王女并兵卒共二十人余生捕、其余者インキリス人共小舟を以救ひ逃去候間、右生捕之者共ハ寧波ニ而致禁獄候処、インキリス人共以書簡申越候ハ、王女を差戻し候ハ、責取候県裡之周山速に差戻し、元之通り広東へ罷越制禁相守神妙ニ商売相願可申段申來候得共、いまた沙汰ニ不被及候、當時寧波江之上使ニハ滿州之武官伊里布と申者被差越、定海之海辺寧波鎮之出口招宝山と申所ニ官軍式萬千余人ニ而防禦致候故、インキリス人共折合候義不相叶、昼ハ周山ニ屯し夜ハ船中へ引取日々同様之由ニ御座候

右ハ本朝天保十一年ニ当ル年の秋なり

何とも高島の考察力を感じざるをえない。これに続けて次のように記しているから、どうやら、オランダの商船か、もしくは開国勧告のために渡来したオランダ使節により伝えられた、アヘン戦争後の中国の現状に関わる情報を、天保十五年初頭高島は入手したものと思われる。

大坂に到来書状之写

長崎より八月廿日出二申来候エケレス一件荒増申上候

追々申上候通、唐国戦争実事ニ而蕪州寧波之辺も責取られ候趣、此処者左甫日本之里数にして十五里斗之処ニ而、定而左甫も及騒乱日本通商所ニ而者有之間敷候、其外唐方在留之船頭共、只今ニ相成昨冬舟渡来候節船中ニ而イギリス船被取廻、蕪州乗筋等相尋候段申出候、尤紅毛人別風説ニ而申上候通、少も相違無之割符を合候様有之旨、右之趣江府江も御駈合ニ相成居申候処、其御下知相廻り九州筋其外近国十四ヶ国軍役衆不残此間御召出ニ而、自然エケレス船地方江参り候ハ、備方嚴重に致候義者勿論急々打果候様申遣置候得共、一応来意之趣相尋、薪水を乞候義ニ候へハ相与へ無事ニ出帆為致可申、自然致手向候義も候ハ、無用捨打果可申段、此外備方嚴重ニ被仰渡候間、即日国江早飛脚を以右之御懸合ニ相成候由ニ御座候

又

右之趣市中町江も御触流し御座候

又

両三日以前、新古カピタン兩人被召出御尋之御趣意も有之、別ニ又聞役中江御達之趣も被仰渡候

右之通ニ御座候

辰八月廿九日

### 3 オランダ国王による開国勧告に関わる情報

#### 3-1 高島にもたらされたバレンバン号来航の第一報

以上のように、高島は天保十五年まで、アヘン戦争とそれに関わる情報を注視していたことを考察したが、オランダ国王が日本に対して開国勧告を行なうために派遣したバレンバン号が、天保十四年十二月長崎に来航してからは、同人は『青菰雜誌』で、この関係の内容に多くを割くようになる。

すなわち、天保十五年六月下旬より七月初旬に長崎風聞が伝わってくるなか、幕府や諸家の早打早飛脚が頻りに往來するに至って、オランダの軍艦が来航したことを知ることになる。高島は、このオランダの軍艦の来航を、長崎では異国より攻めに来て今にも合戦が起こるのでな

いかと言いはやしている、と伝えてはいるが、あわせて、この度のオランダの行動は、同国がロシアの属国となつており、その指図を受け日本との交易を望み、日本を併呑するためであると考へている。そのため、ロシアはすでに北国に来て日本の様子を窺っていたが、これに連動して、前年に異国への手当として伊豆下田と奥州羽田との二ヶ所に新規に奉行が置かれ、大身の旗本が海岸の備えを行ったとする。また、ロシアが同国に漂流した日本人を丁寧日本に送り返すため何度も来航した理由を、何とか日本と関係を付けようとするものである、と述べるのである。

むろん高島は、この段階では、オランダが使節を派遣した目的を知る術もなく、続けて次のように、水戸藩で西洋砲術の稽古を行つている状況を述べ、国内において今後の対策を講じる必要性を感じるに止まつている。

去レハ水戸侯も頻ニ火炮を取寄ボンペン杯を試ミ頻ニ軍陣之稽古有テ、海岸之手当専らなるハ自然識目高く竟ニ行末之見計りあらん歟とも難斗杯といふ風分も有、何様油断のならぬ仕打なれ者本朝とも能く思惟セすん者あるへからす

### 3—2 天保十五年八月頃にもたらされたバレンバン号来航情況

高島が入手した、長崎に来航したオランダ使節に関わる情報は、初めは雲を掴むようなものであった。精確な日はわからないが八月頃であるう、三井の長崎店から京店に送られてきた書付けを入手し、定例のオランダ船とそれに続く同国の使節の来航情況を知るに至る。

もつとも、まだこの段階では、高島はオランダ国王の書簡の内容を知り得ていないが、七月に入った頃より伝わりはじめ、八月上旬に至り頻繁になつた風説として、そのような歴史的事実は確認できないが、オランダ船が長崎に入港する前に琉球で行つた活動の情報を入手する。

すなわち、この度オランダ国王が使者の船を日本に遣わした理由は、日本側が異国船と見ると打払うか焼払うかで、外国人は大いに恐れ、日本は不仁の国風であると言つているためであるという。またオランダ側は、日本が素直に助言を聞きいれないことを想定しており、そうなれば自分たちは本船を引取らねばならないから、人質を置いていく代わりに琉球にしばらく滞在したい、と述べたというのである。

このようなオランダ側の申し出に、琉球側は篤と考え後から返答すると述べ、薩摩藩に報告するが、これに対し



て薩摩側は、この手当のため琉球へ大勢人を差向けるとともに、幕府へ報告するに至る。これに対しての幕府の掛合は判らないとしながらも、オランダ人両人が琉球に人質として取られたことは確かで、これによりオランダ側の希望は叶えられた、と高島は述べている。

この琉球からの報告で、幕府は事前にオランダの使節が渡来することを知っていたはず、と高島は考えているが、「中々容易不成一朝一夕之事ヲハ不被思、何様深様子有氣ニ相聞、定而本朝心配筋ヲ聞ユル」として、「世上浮説も不宣事のミ言触ら」していることを伝える。また「追々種々の風説奇説致すといへとも、実否慥ニ不知故一々ひかへ難し」としながらも、松前の僧侶から、日本人および蝦夷人が行き来しているウルップに、十四五年前にロシア人が大きな城を築き、大勢で守つてゐることを聞き、高島は、日本の押えかもしくは合戦をするためであろうと推定し、西洋人に対する不信感を顕わにする。

### 3—3 幕府御徒目付松永定作よりもたらされたバレンバン号来航状況

長崎に来航したバレンバン号について、世説および三井の長崎支店からの情報を入力した高島であったが、オランダの定例の船が差し出した「風説書」と「別段風説書」

の内容、さらには、今度のオランダ使節の来航にともなつて九州諸藩の対応ぶりを、筑前久留米屋敷から入手する<sup>②</sup>。また、以後同人に、バレンバン号と折衝するため幕府から派遣された御徒目付松永定作から、詳細な情報もたらされたことは、特筆すべき事項である。

幕府から長崎に表向きに派遣されたのは、御小人目付一人、御徒目付一人であり、そのうちの御徒目付一人が松永で、御小人目付の森澄太郎作とともに、長崎に向かう途中高島宅を訪問する。この二人が、いつ高島宅を訪問したかは、正確にはわからないが、高島は、二人が七月九日京都に着き一二日に大坂を發し長崎に向かつたとしているから、この期間であつたことは確かであろう。そして、これまた期日は正確に知ることはできないが、この長崎に派遣された幕府の役人らが江戸に戻る途中、松永は再び高島邸に立寄り、よろずの話をしていた。そしてその際に、長崎でオランダ本船に乗り点検した松永より見せられた上書を高島は写し、『青菰雜誌』第拾八に「江府從松永氏來ル紅毛本船記文」と題して収載している。この松永から写した「江府從松永氏來ル紅毛本船記文」は、表紙に「阿蘭陀本国船渡來見聞書」と記されているもので、高島は次のように述べ、松永より幕府に差出した報告書であろうと考察する。

諸役人本船江乗移り檢使之節、船中其外何角見聞之次

第を帰府之上相認大目付江差出し、夫々老若迄一覽被致候事<sup>②</sup>見へ候

ただし高島は、この松永が作成したと考えられる報告書について、「世上流布之風分風説書とは文章違たり」として、バレンバン号に関わる風説が、世間に出回っていたことを伝えているのに注目せざるを得ない。むしろ、このように高島が述べるからには、同人もいくつかの世説を入手していたわけで、『靑菰雜誌』第拾八には、御徒目付か御小人目付から差出した「実事見聞書」と推考し、内容はこれまでのものと大同小異であるが認め置くとして、「天保十五辰年七月二日、玉ノ浦江渡来和蘭陀本国船見聞記<sup>③</sup>」と題する報告書も掲載している。あるいは松永と同行した人物の報告書とも考えられるが、今その確証を得る史料に恵まれない。

### 3—4 長崎発の書簡と長崎から江戸にもどった人物の弁

以上のように高島は、二点の報告書によりオランダ使節の渡来情況について詳細を知り得たわけであるが、同人は幕府のオランダ側への対応に批判的な見解を持つに至る。月日は不明であるが、松永から情報を得た後に高島は、「従長崎表之来状同様之事ハ略之」として、長崎発の

書簡の文面から、さらなるオランダ使節の渡来情況を知るのである<sup>④</sup>。

さらに高島は、「七月上旬出二従長崎之来状之内、前之同様之文ハ省之要用<sup>⑤</sup>秘萃左二」として、同地でオランダ船を七月二日卯上刻に見出し、高銜あたりに入津し同所に碇泊し七日に湊に入ってきたことを記す。またこの度のオランダ船が、国王よりの書簡とともに、「猷貢之細工物」を持参してきており、受けてくれるのであれば、江戸までからくりを取り扱う者も連れて行き、細工を披露するという。さらに国王の書簡も、命じられれば江戸まで持参するが、「猷貢」を受納しないのであれば、書簡も封のままに返してくれるようにと述べ、日本側の返答を待つ、と選択を迫ったという。そしてこれに対して長崎では、刻付便を四日夜に発するに至るのである。

長崎からの書簡は、このようなオランダの書簡と贈りものに加え、オランダ人らが、江戸表の命令であれば考えるが、「玉葉おろし并人別改」は自分たちは商売船でないので断ると述べたこととともに、次のように長崎での心配振りを伝える。

彼方之模様異国之風<sup>⑥</sup>与歟乍申、何とか餅二骨とか申様成模様二而御奉行始メ御目付其外二も御懸念之事共二御座候

そして、この長崎からの書簡について、高島は次のよう

に述べ、国内の政治を批判する。

莊肅、今此書翰ヲ写スニ付、此一段之文意ヲ見て扱  
く、外夷へ対し本朝近來之國政あさましき取向之段、

甚以恥辱千萬無念之次第と思ふ

また長崎奉行をはじめ目付は、自国の政治の不祥事に気がつかない愚物で、これをよく承知したオランダ側は、二、三十年「長崎交易之仕向無理非道我俣千萬」であるという。高島は、先年江戸に拝礼の節、オランダ商館長が江戸城中で脇坂淡路守殿へ直願を差出し、脇坂が甚だ困りながらも預り置いたことから察するべきであるという。さらに、政道について問題点を指摘する。長崎奉行になる者は「強欲非道」で年々増長しており、この原因をすべて幕府の「不政事」によるものとする。そして、幕府側が長崎で起きたことを同地で処理するようにしているために、オランダ人はこの度のような強硬な態度に出たというが、次のように再び、日本の政治の不正は外国へ対して恥ずかしいと結ぶのである。

紅毛ハ諸國ヲ相手ニ交易シ宇宙橫行之人物、なんそ本朝當世の人機國政之塩梅相察セざらんや、彼二少しも無理ハ非ス、皆我國政之不正より発る事と思わる、外夷ニ対し恥ならずや

高島は日本国内の政治状況に不満を募らせているが、薩摩藩の何某より出た情報として、「長崎治、野元某を遣候

書状写」について必要な部分を写している。これについて高島が記したコメントからは、オランダ使節来航による九州方面の困惑が見取れる。

すなわち七月二日、豊後日田竹田照蓮寺、筑前福岡城下徳栄寺、筑前建立寺をはじめとして「九州地所々追く之風分書之來書」を見た高島は、「其あわてたる文体言語同断、必偽りを認め登す了簡二ハ無之事ながら、其間筋く二而仰山成様子」という。無論このようなことは前例がなく、長崎奉行が出した触れは厳しく、この下知を受けた諸大名は初耳に驚き、すべて戦争の支度をして、各城下の民衆もそのつもりでいたが、よくよく聞き日がつに従い、「思の外成事ともなりと思ふらん」という気持ちになったようである。このことは京坂でも同様で、最初は「仰山ニ言触らせし故益く風評かまひずし」という状況であり、高島は、「事実与不思文章」は『青菰雜誌』には省くと述べる。

以上のように、最初オランダ使節来航によって九州地方で困惑していた状況から、次第に安堵して、京都の高島なども、さほどのこともないと考えるに至ったわけだが、そのような中、ある美濃人が江戸で長崎の者と対話した際に聞いた情報を入手する。

十一月十七日に美濃人は江戸のどこかの塾に行き、長崎から江戸に久々に帰ってきた塾生に、長崎での、オラン

ダ船が来航し「中々不容易」である様子を聞く。オランダ側から幕府へ呈出した書翰には六ヶ条の願いがあり、その内容は次のようなものであるという。

其内一ヶ条ハ大奥之美女を一人頂戴致度事、一ヶ条ハ年々式万石宛米頂戴致度事、其余之事はて交易筋之事之由

また、これに続けて長崎の者は、オランダが提示してきた六ヶ条を日本が許容しない場合は、「干戈ヲ差向自是を取らん抔と申様之不敬之文言有之由」として、幕府の議論も区々ありいまだ返翰を出すに至っていないという。幕府にしても、オランダの要求を受け入れるとなると国体にかかわることで、幕府が許容せずオランダ側が干戈を差向るなれば、勝手次第に差向けるように仰せ遣わす方がよいと、老中の水野、阿部が言ったという。もつとも、この二老中の発言に対して、その余の役人や林家をはじめ、現今のような太平の時代に干戈を動かせば天下の騒動となり、人民も多く費用がかかるのみならず、諸侯が困窮し内乱でも起きればもつての外で、交易の事などを許して「聊之事国之費ニ相成候事ハ無御座」という者が七分で、いまだ決していないという。このような情報は至って機密であり、はたして、長崎の者は美濃の者に伝えるに際して、内々にしてくるよう言ってきたようだが、話を終えるにあたって次のように述べ、老中

水野は何のなす術もないとするのである。

流石ニ越前殿了簡兎角無御座候、長崎辺ニ而ハ齒ヲ嚙罷在候由、何れにも大議論ものと奉存候

このような情報を入手した高島であったが、「因ニ云、京師ニ而も同様之話有之、美女之事ハ信義ヲ結為ニ而先方よりも可相渡申候与歎申人も有之、実哉否也」と、京都で同様な話がささやかれているとしている。また高島は、「此説如何ニモ異事ナラン」として、弘化三年以後に、関係情報を整理したのち次のように書き足している。

此折柄外ヨリモ斯有リシト聞タリ、後ニ能聞ハ、台命ニヨツテ林家ト学校トへ被仰付、交易差免して能哉あしき歎書付ヲ以可申上旨被仰渡、則古家弥助、佐藤一斎兩人論セル事アリ、則弘化三丙午七月之処ニ委敷述タリ、夫ハ則此時之評論ナリ

すなわち、儒者が外交問題に関与したことについて、「嗚呼武威ハ衰ヘタリ」として、「儒者等ニ口ヲ開カスニ及フ可キ論ズルニ不及事也」とまで考え、次のように述べる。武家の学問である儒学を、京都に住む高島は承認していなかったと考えられるのである。

能ク我国寿家、以来度々異国ノ事ニ付一言モ悪名ノ有ラヌ詔ヲ察スヘシ、先代明々良々タル格言アリ、唯一言ノ論議アルヘキ様ハ非ス

むろん高島の弁に反して、儒者のなかにも異国に対して

批判的なものも多数存在したわけだが、交易を許そうとする幕府の役人らに対しては、「畢竟今世公家堂上女童之沙汰といふもの二而、沙汰之限り更ニ無論」として、公家同様弱腰な態度であると言わんばかりである。さらに、これに続けて記した次の文から、同人が幕府を批判的な目で見ている様子が垣間見える。

是ハこれにて扱もく徳川之武威も末に成たりく、歎くべし、いたむべし、此末如何成不調法も出来千歳万歳迄之恥辱哉発らんと予ハ夫のミ苦心セリ、何卒

天照大御神之ましまさん限りハ鹿骨なる事の発らぬ  
様仰天伏地希ふ者也

この文から、高島が徳川幕府よりも朝廷に重きを置いていることがわかる。また、次のように結んでいるのは、学問の中心は京都であると言わんばかりである。

因云、当世之学者ト唱る、者程猿間敷ものハあらし、就中近世江戸調といふて一風有学文扱もく馬鹿と敷、学文ニ而も何でもなく甚以世の障りとなる事のミ多ふくして議論ニカ、ルものならず、併自分時世の為ス業にして、必惜むへき事ならねとも夫故愈いあぶなき事かな、此上ハ唯 神明之御加護ヲ希ふより外ハあらし

### 3—5 天保十五年七月六日に博多から発せられた長崎事情の分析

オランダが日本に開国を勧めるために送り込んできた使節に関して、長崎からの書簡もしくは長崎に行った者による情報入手するに至った高島であったが、天保十五年「筑前博多の七月六日出之書状ニ、此度長崎表紅毛本船入津之大略左之通」と記した情報により、さらに長崎での混乱<sup>⑧</sup>ぶりを知る。

六月十五日に長崎に入津したオランダ人は、これまで交易を望んでいた「咬啗吧国」から、同国に漂流した八人の日本人を連れて来たのだが、一向に日本側は取り合わなかったという。そのため、オランダ人は立山役所へ訴え出るに至ったが、これにより幕府は九州の国々に「大早飛脚」で触れを出し、長崎の固めについては追々早打で「櫛之歯を挽が如く」に伝わり、「其騒動大方ならず」といった状態であった。しかし最も大変なのは、長崎警備に携わる福岡藩、このとき当番であった佐賀藩であった。同月十七日には、福岡藩から「一番、二番、三番」と追々軍艦が長崎に到着し、同地は戦闘の用意を調べている様子を、博多よりの書簡は伝える。

どうやら、佐賀藩は十九日に発向し、戦う用意をしていたようであるが、当七月二日末にオランダ人が訴えた通

り、「長サ五拾間余、横巾廿間余之唐船」が、「カウ崎」という所へ入津したので、またまた早打で触れを出し、長崎をはじめ九州筋は、上を下への大騒ぎとなった。そのため福岡藩からは、七月五日に領主の名代である黒田三右衛門以下「都合惣勢式千余騎、軍船大小百廿艘」が国元から発向して、道中筋は人が歩くのにも困る有様で、「提燈、松明」が夥しく用意されているという。

このように、長崎警備に携わる佐賀、福岡両藩は、オランダ船に対して長崎で備えることになったが、それ以外にも、平戸、大村、唐津、嶋原、そして長州も長崎に出帆し「思ひく」の船印誠ニ美々敷前代未聞ニ御座候」と、博多よりの書簡は伝えている。そしてこの書簡の発信者は、来航したオランダ船について、次のように様子を伝え、結びとするのである。

異国船ハ石火矢甘挺余、外ニ国崩シト申て長サ三間斗り、廻り五六尺、唐金ニ而造り候兩様自在ニ式三人ニ而致取扱、其中ニ毒焰炮与申物を仕込居候由、外ニ武具数多致持参候由

以上、博多からの七月六日出しの書簡内容を概括してみたが、高島は、「此書の驚動見るべし」と一段高いところから見て、次のように冷静に判断している。

元来紅毛本國船の来るといふ旨趣、荒かしめ初る為知  
訳ニ而、何にも合戦ニ及ぶ筋ニ不有事ニ而、別して年

来渡海致し来れる紅毛、彼も五七日以前商船入津ニとく其訳ヲ断り置しなるに、長崎奉行初しめ以之外驚しハ甚以不東至極セリ、長崎奉行隣國諸家へ之觸渡し仰山成故ニ其機さし御座候

合戦をするためにオランダ人が来日するのではないので、何を驚いているのかと言わんばかりであるが、やはりそこは京都人で、事の重大さをよく理解できていないのであろう。次のように述べていることはそのことを物語る。

下民の事なれ者深しき訳も知らされ者、他國へ之風分も右躰之文段ヲ認登す

もつともこのオランダ使節の突然の来日について、高島とは違い、一般民衆は過剰に反応したらしく、高島は、アヘン戦争の影響であるとして次のように述べる。

近來清朝与エケレスト戦争、且清朝不利エケレス勝タル体之物語モ及聞し事なるか故今にも我國ヲ責来らんと思ふ、民俗の愚味何角ニ付仰山ニ言はやし種々符会之説く区くたり、尤是諸家之手当も大概此趣なり

高島は一般の民衆および武家らを侮蔑していたようだが、幕府の役人などから機密性の高い情報入手している気概もあったのか、最後は次のように結んでいるから、現実をどこまで認識していたか、疑問も抱かせるのである。

右之風説ハ一々取ニ不足事ながら、当時世上之機配ヲ後世可相考為ニ斯寫置、必此風説來狀之如き訳ニハあらし

### 3—6 長崎と取引のある人物からの廻状の分析

以上のように、少しオランダ使節の來日を樂觀視していた節がある高島であるが、次々ともたらされる情報を分析する中で、感慨をあらわにしていく。月日は欠くが、天保十五年長崎と取引のある京都にいる人物からよせられた廻状についての分析から、高島のオランダ觀を見出せる。

小国オランダとの取引について、日本は現状で事足りているのに、この度渡來したのは大船で、同国で造った船ではないのでは、と高島は疑念を抱く。そして、結局オランダがロシアの属国となつているとし、大黒屋光太夫を連れてきたときであろう、文化年間に交易を願ひ來日してからの経緯をひもとき、このたび來航した長崎の船というのはロシア船であろうとする世説に、高島は同調するに至っている。『青菰雜誌』第拾九で、天保十五年七月頃再び次のように述べており、この考えが同人の心に根差していたことがわかるのである。

阿蘭陀国ハ近年オロシヤ之属国と成シカラハ、今度之

別船紅毛仕立成とも、紅毛ハ元來至而小国ニ而我国の九州程もなき小国、兎角海外之萬国へ通商を専ら心掛夫のミニ暮らし居る国ニ而、逆も自己一国之望ニ而我本朝ヲ子ラヒ望む様なる国ならず、全オロシヤよりの内意にて何角手段之可有事与、夫故畢竟一船入津二者我国此度之御手当些仰山過たり、公義ニも全根深き訳あらんとの御先見を以て、九州筋諸大名御手当被仰付よし風分す、けに此度之催しハ紅毛一国之存意とハ見へかたし

むろん、このような高島の考えは、同時代の人物の分析ではあるとしても事実ではない。しかし、前述の京都にいる人物からの廻状に対する、來航したオランダ船が五嶋沖を通過して長崎に入港する前にしばらく滯船したころから、長崎から江戸への早飛脚が昼夜絶えず、在府していた福岡藩主から早飛脚が日々時々刻々であるという高島の弁は確かであろう。同藩の混雑振りを察することができるが、この時点で「石火矢其外武器不相渡、又ハ相渡ス歟否之掛合中」で、オランダ側の渡來の目的を日本側が聞くには至っておらず、高島は、「大概我国些困ル筋之義ならんと推察するもの有」ることとともに、次のように述べ、追々情報が入つて來るのを待とうとするのみであつた。

けに近年公義之御政事海外之御掛引迄乱墮にて不法多

ふき折にて有し跡故、嗚かし我国非義多からんと察せらる、追々如何躰之成行ニ可成哉ト此風聞ニ而人氣一段六ヶ敷見ユル、追々様子可相分事也

3—7 オランダ船入港にともなう京都での反応と、天保十五年十二月初旬におけるオランダ使節に関する高島の分析

オランダ船の長崎入港により、九州の大名が同地へ赴くことになったことは既に述べたが、七月二日長崎にオランダ船が入津したことが伝わると、京都では「弥市中一人人気二障る」ことになった<sup>⑧</sup>。混雑が発生し九州の商人と取引ができず、京都では呉服屋が困っていることを高島は伝えている。このオランダ船来航の影響で中国船が欠船になるのはなからうかとする推測のもとに、薬の相場は高くなっていたが、幸い中国船は七月二十日に三艘入津<sup>⑨</sup>、京都市民も安心する。むろん高島と同様であったろう。この唐船が同国へ漂着した阿波の者を一人連れてきて長崎奉行へ引き渡し、同人は本国送りになったが、その口書として、「清朝とフランス国と戦争有といふ其書取も有由」としている。高島は次のように述べ、錯綜する情報を正確に把握しようとしている。

追而可見也、実否如何あらん、是を混雜して此度紅毛

本舟二つれ渡りしといふハ間違なり、猶調らぶべし  
中国船の来航はともあれ、高島がオランダ使節の来航目的をどのように考えていたかとなると、天保十五年霜月の内々の風聞で、同人が十二月上旬に入手した「極密之風説」<sup>⑩</sup>は注目に値する。

国王からの書簡を運んできたオランダの軍船は、十月に一まず帰帆したが、幕府側ではオランダ側の要求を七八分間届けることになるであろうとしているが、高島は、オランダからの申し立てについては、次のように述べるに止まっている。

彼国<sup>⑪</sup>之申立ニハ三代家光之節何角相定り候通被成下候様、当時ハ其頃よりと違ひ何角交易被下もの惣而減少成り居候故、惣而三代將軍之時の古格の如く立戻り候様との内願是第一之申立のよし、別而近年午内々交易之米一兩年來サツハリ相止ミ候ニ付、差当り彼国之人命ニ抱り候故、何卒向後表向十萬石交易被成下候様との願、是結る処彼国之懇望第一之手段与相聞ユル

どうやらこの時点で、ロシア船であろうとする考えは消えていたと思われるが、本来の目的である日本への開国勧告について全く触れておらず、オランダ側が貿易量の増大と米の輸出を日本に要求してきたとする内評を、高島は伝えるのみである。そしてこれに続けて、米を輸出することは国体にかかわるが、幕府側は戦争に及ぶこと



を恐れ、これを実行する評定があつたとするのである。

なにゆえこのように、オランダの開国勧告が貿易関係の内容になつてしまつたのかはわからないが、オランダ側への返簡の作成が対馬藩の掛合となり、同藩勤番の以酈庵と輪番の建仁寺の長老に命じ、「其内二三部方ハ何共御開届難被遣趣有といふ」としているから、割合はともかくあるいはこの「二三部」がオランダの開国勧告である可能性もある。しかしいづれにしても、天保十五年末の時点で、一般の民衆がオランダ国王の書簡内容を知ることとは困難であつたと考察されるのである。オランダ使節の来航意図を知らない高島は、米を輸出することは天照御神以来なきことであるとして、以下のように日本の国体の失墜を患うるのである。

向後往々之障り後年大ひ成病ひ、万世之かきん、後年ほぞをかむとも後悔万々ならん、口惜き次第なり、去れとも是天命のしからしむる時節至来天命の為す歎歎、実ニ我国之日月地ニ墮たり、徳川之運命ニハあらす、我御大神之御神霊も最早ましまさぬ歎、紅源<sup>②</sup>一身をひたすあわれ我神国の御魂今一度出まし、此折公義内定をくつかえし日本魂を以彼国返輪調へかしと祈希ふ

このようにオランダ使節の本意を知り得ない高島ではあったが、同人の耳には様々な浮説が飛び込んでくる。オ

ランダが日本の小島四、五ヶ所を借り、交易場としたいと考えているといった風聞がその一つだが、高島は蔓延する俗説を冷静に受け止め、次のように述べる。

実否不定、是ハ此度紅毛本国之使節容易ならぬ事と見込故、其枝葉ニ付て浮説様くなり

また、このような浮説が飛び交う背景として、九月上旬の風聞を取り上げ、紅毛本船の書簡に次のような願いが述べられていたためである、と考えるに至っている。オランダ船は先年より内々に竹島や新潟洋で日本の米を交易していたが、一昨寅年より一粒も入手できなくなり、このままでは国民の人命にかかわるといふ。そのため、今後は表立って米十萬石を交易してくれるよう頼み、これを聞届けてくれたならば、オランダは交易している国の品について何艘でも渡海し持つてくる、と高島は記している。

もつとも、高島が「虚実ハ不知」と述べているように、このようなことをオランダ側が提示してきたとする記録は見当たらないが、高島をはじめとする京都市民のみならず、日本経済の根幹というべき米に敏感にならざるを得ない結果の風聞であり、八月ごろ、次のように、オランダ船警固の影響で白米一升が百文となつたことを記している。

紅毛本船固め之手当故、九州辺之諸大名定て今年ハ新

穀登し方減すへしとの心得にて、米価追々引上ケ此節白米壹升百文となりぬ、其外余業人氣も追々メリて六ヶ敷なりたり

しかし、オランダ使節の来航により高く推移した米相場は、天保十五年十月十八日に同使節が出帆したため、下落に転じたことを、高島は次のように記す。

十月十八日紅毛本国出帆二付、十月下旬米三四匁下ル高島だけでなく日本国民全体が、米相場に影響を及ぼすオランダの動向に関心を抱いたことであろうが、同人は「諸人之口称」を受け、イギリス、フランスなどと同様にオランダがロシアの属国となつてゐる、と再び述べてゐる。この度のオランダの来航も、ロシアが日本と米の交易をしたいがため、ロシアの手先としてやってきたのであるという。また、オランダは日本に対して手出しはしないはずだが、文政時代にロシアが日本と交易するため使節を送つたが日本側で断つた縁もあり、ロシアの考えにより争いを起すのではないかと考えるに至つてゐる。

オランダ船バレンバン号に乗船していた特使コープス海軍大佐が、商館長ビクを伴い、八月二十日に国王ウィルレム二世の親書と贈品を、幕府側の長崎奉行井沢美作守、目付平賀三五郎に手渡したことは、これまでに明らかにされている。また、オランダ側が、十月二十一日までに

長崎港を出帆する必要性を説き、幕府側もこれを認め、結局井沢美作守が平賀と交代した長崎在勤目付遠山半左衛門とともに、十月十日コープスおよびビクを立山役所に呼び、親書の受納を伝達し検討する旨を伝えたことも周知の通りである。つまり、日本側がオランダ側から親書を受理した結果、バレンバン号は十月十八日に長崎を出帆し、パタビアに向つたわけだが、この事情を高島は『青孤雜誌』第拾九に次のように記している。

頃日承れハ、去々十月十八日出帆せし紅毛本国之軍船も先御下知二付出帆致すれとも、明巳年三四月之頃御返翰頂戴ニ渡海仕候、夫迄ハジガタラ江引取居可申与使節の口上にて出帆せしといふ、左もあらん然らハ明巳年三四月にハ此度之返事を承りに渡海致スと見ゆ

「頃日承れハ」とだけで、出帆したオランダ側が返事を聞きに再度来るといつた情報を、高島がどこから入手したかはわからない。あるいは、前述した、バレンバン号に対して江戸から派遣された松永あたりから聞いたのかもしれないが、高島がオランダ使節について再度強い関心を示すのは、弘化二年を俟たねばならない。

#### 4 天保十五年から弘化二年における蝦夷地関連の情報の入手

4—1 天保十五年、松前西教寺の僧侶から入手した情報

以上、天保末年における、高島の対外に関わる情報の入手と分析状況を考察してきたが、細部はともかく、高島が、アヘン戦争に関わる情報、オランダの開国勧告といった、同時代における重大事件に興味を示していたことが確認できる。しかしながら、このように事件として起きた際立った歴史的事象だけでなく、水面下で進行する対外問題である蝦夷地に関しても、高島は情報を入手し、分析を進めていたことは注目に値する。蝦夷地に事件らしい事件も起きない時期の天保十五年八月中旬、高島は、松前の西来寺（西教寺の誤まりであろう）の僧侶が讃岐の金毘羅参詣に赴くにあたって訪問を受け、同地に関する知見を得て、関心を深めたようである。

高島はこの僧侶から、天保十四年水戸家の内使として、重役原十左衛門と添役八谷左内が多勢を連れ、常陸から奥州東岸の岩城、相馬、仙台、南部、津軽などを残らず見分し、松前に渡り、松前七十里の海岸をこれまた残らず点検したことを聞く。また、この内使が松前侯に、よくよく気を付けられるようにとの内意を述べたのち、帰路秋田でも同様に、海岸の固めについて油断なきように

と伝えたことを聞いた。高島は、幕府だけでなく、水戸家が対外関係を大いに心配しての行動であるとして、次のように、同家を少なからず評価するに至ったのである。

はたして此度紅毛之一条差起りしを見れば、全水戸殿馬鹿ものニハあらず、思ひ当る事のあらん

しかしながら、西教寺の僧侶は、水戸侯が「ドンドロボンベンをためし打」して落ち度があったとする風説を伝えているから、同家が海防を行う際の技術水準までは評価しなかったと考えられる。またこの僧侶は高島に、松前藩が幕府からの命により、砲術の先進地である信州真田家に、表向き手伝いとして両三人を遣わしたことを語ったが、さらに、真田家の砲術研究情況として、次のように語ったことに注目せざるをえない。江戸屋敷に住する松前家の人物の話として、東海道を経て信州松代に立寄り、この砲術打ちを一見したいと思っていたところ、次のように、大音量でその演習音が聞こえたというのである。

箱根関東へ来る十町斗前ニ而夥敷音して山谷ニ響わたりさも仰山成響有、是則信州松代ニ而打上ケしドンドロボンベン之由

高島は、真田家における砲術研究の先進性を感じ取ったであろうが、残念ながら「由」と述べているように、この松前家の人物は二日遅れたため、この大音には遭遇で

きなかつた。いわば伝聞推定であつたわけで、西教寺は高島に次のように語るのである。

箱根山中の信州迄ハさし渡し凡二十里斗もあらんニ、さもすさまじき音のするものかなと松前家中之物語セしと西来寺物語セリ

#### 4—2 ロシアのウルップ経営に関する情報

西教寺の僧侶から松前の実状を聞いた高島であつたが、どのような経路であるかはわからないが、同人は天保十五年、蝦夷地で起こっている異変を知り、ウルップ島に関する自身の知識の総点検を行っている。

松前からおよそ四百里北西にあるカラフトには陣屋があり、年々江戸より役人が下り交代していたが、このカラフトから十六里北にあるロシア領土ウルップで起きている異変を、高島は記している。すなわち、ロシア政府が官人を派遣するとともに属国属島の者を住ませ、文化年間から数万人により大きな城を築き初め、天保九年に大坂城の数十倍で堅固見事な鉄城を落成したという。当然、蝦夷地の交易をする松前商人たちは、このようなものを築いたことを、カラフトを往来する際に知ることになつたようだが、高島は、次のように日本側が不安を募らせていると述べる。

是迄毎度松前ニ沙汰せるハ全ヲロシヤより我国ヲ望ミ竟ニ呑んとの支度、我国之愁ひいつ歎爰ニあらんといふ、勿論公義にも年々歳々此事委敷承知之筈也

加えて天保十五年秋季、ウルップにロシア人およそ十万騎が籠るとともに、合戦には至っていないが、ロシア側が兵船大小千五百艘をつないで、日本とロシアの国境としていている柵を潰したという。むろん、カラフトの役所は、このロシア側の行動を、江戸に早打ちで知らせたが、幕府は「当時紅毛本船并琉球之模様も有之」、大いに驚き、奥蝦夷に向け多くの諸役人を下す考えがあるという。また、幕府の役人に加え、東北諸藩にも海岸を嚴重に固めるよう幕府が命じたことを、高島は記す。

このようなロシアの行動について、高島は、蝦夷地の東西にある同国領土で、海賊行為をして騒いだことがこれまで何度かあり、文化文政年間には日本国内に響くほどであつたという。また、このたびのロシアの行動を次のように締めくくり、改めて憂慮を示しており、開国後に発生する領土問題を予言したようにも感じられる。

既ニ当天保十五甲辰年九月ニも松前の二百四五里北ニエドモといふ処有、其エドモへ夷人來り乱妨せるに付、松前領主のふせきの勢一番手二番手迄被差出されたり、是実事ニ而松前之兵の慥ニ承知致ス、嗚呼竟ニ後年我朝之病ひならん歟

#### 4—3 弘化二年正月上旬、松前西教寺からの情報

高島が、北方に関わる情報を、はたしてどのような人脈で入手していたかについては、判然としないが、前述した松前の僧侶との交際は以後も続き、同人より情報をもたらされる関係に発展したようである。弘化二年正月上旬、高島は、松前に帰った西教寺（前述、西来寺と記した寺と同一と思われる）の僧侶が前年霜月に松前から発した書簡を入手する。

松前城下より六十里ほど北に六ヶ所の大湊があるが、そのうちの一つの「ト、ホツケ」というところにロシアの属国船が二艘来て、越年を乞うので許可した。そのため、松前から二番手までの人数を差向け警固にあたったが、その背景として、同地が文化年間にロシアが乱暴をはたっていた場所であることも関係しているというのである。その折も、初めは今回事様の願いで置くことにして、薪水や食料を乞うので遣わしたが、その後乱妨におよび騒動となったので、今回も同様ではなからうかと松前では考えていると、西教寺は伝えてきたのである。西教寺は、文化文政年間におけるロシアの日本に対する行動から、この度も幕府や松前藩が警戒をしたとするが、高島も同じ感慨を抱いていたと考えられる。

#### 5 天保十五年琉球へのフランス船来航に関わる情報の入手

以上、天保改革期における高島の対外情報の入手を見てきたが、この期間において同人が入手した関連情報として、最後に、天保十五年三月に琉球に来航したフランス船<sup>(5)</sup>について触れることにしたい。

天保十五年八月上旬、長崎からの風聞が高島にもたらされたが、これにより同人は、薩摩藩が琉球に人を送ったこととともに、前述したオランダ使節の問題とは別件であるとする薩摩から幕府への報告書を入手したようである。しかしながら、京都市中では関連情報が次々とさやかれる中、高島は次のように述べているから、八月下旬の高島のもとには、それを上回る情報はもたらされなかったようである。

八月下旬琉球国之風分頻りなれとも、其風分之荒増ハ全前段薩州之風説書と似寄故別ニハ不認、何れ実説ニ而何角掛引之有事とハ見ゆ

また、どうやら八月の段階で、来航した船がフランスのものであるぐらいは知りえたようであるが、次のように述べているから、同時代の民衆に、長崎でのオランダ船

の渡来と混同している向きがあつたことには、注目しておかねばならない。

琉球国へフランス国の船乗来りし風分有、是ハ別ニ薩州之文牒ヲ以考ふへし、此節長崎紅毛咄しと混雜して市中ハ一緒ニかき交へての取沙汰故にて致すれども、紅毛トフランスト内証ハ一緒かも不被斗共、来りし趣意ハ格別也

そして高島は、このフランス船の来航は、前述のオランダ船と同様ロシアの属国となつてゐるからであるとする。むろん、ロシアの影響とするこのような考えは、高島ひとりのものではなく、同時代一般であると思われる。天保十五年十二月頃の風説であろうか、『青菰雜誌』第拾九は、薩摩藩主が琉球での出来事により、予定より早く帰国することを、次のように伝えているが、この中に同時代の対外観を見出すことができる。

薩州殿交代ハ来ル巳ノ四五月可為之処、俄ニ当辰十二月中旬江戸発、是ハ当夏琉球国へ来ル異国フランス国之二人船ハ上ケ置帰リシ今ニ連ニ来ラズ、当霜月極月ニ奥エソ之一件差起リ来リ江戸ハ類ニエゾ地へ役人下る故、琉球国之事も油断ならずと思われしと見へ、俄薩州殿琉球手当之下知ニ帰国致さる、何分斯四方ハ挟ミテ騒カス事以外成リ、明春ハ撫カシ驚ク事もあらん、扱々世上之人氣ニいかふ障ルなり

北地での騒動があつたと思つたら、今度は南の琉球で、と民衆の間に不安が募つた様子を、高島は的確に描写している。また、天保十五（弘化元）年末には、日本の中央にあたる能登の三崎洋に異船が二十艘見えたとして、加賀藩より手当に人数が差し向けられたことを高島は記しているが、極月中旬唐船について心配する風聞が流れるなか、同月二十日に四艘が入津し、乾物類についての穏やかな状況を伝えるのである。

## 6 まとめ

以上、天保十二年より弘化二年初頭における、京都商人高島勘兵衛の対外に関わる情報の入手とその分析を、同人の作成した『青菰雜誌』から考察してきた。その結果、この間同人は、同時代における重大事件であるアヘン戦争、オランダ使節の開国勧告、蝦夷地でのロシアの動向、さらには、琉球へのフランス船の来航を注視していたことを明らかにした。いまその各々について、高島がどのように情報を入手し、どのような感慨を抱いていたのかについてまとめ、本稿の結びとしたい。

### (1) アヘン戦争について

関連情報をいつ頃から入手し始めたのかはわからない

が、天保十三年六月二十七日に来航したオランダ船からもたらされた情報を入力し、中国の現状を知るに至ったことは確かである。高島がアヘン戦争の日本への影響として最も心配したのは、中国との貿易が断絶することであつたようだが、その一方で、天保十三年の時点で、幕府側が九州あたりの海防を強化するのではなからうかと考察するのである。ただし高島は、オランダからの情報を考察するに際して、同国に対して少なからず色眼鏡で見ていることに注意せざるを得ない。

さらに高島は、天保十三年六月十九日に来航したオランダ船にイギリス人が同乗しており、オランダを介して長崎奉行に封書を差し出した、という情報を入力するに至つた。このイギリス人が同国の国政に関わる人物から預かつたとして差し出した封書には、「日本国長崎御奉行様」と認められており、驚いた奉行は開封せずにこの封書の内容を知ろうとして、オランダ通詞を介してオランダ人とイギリス人を呼び、内容について心当たりを尋ねる。イギリス人は、詳細はわからないとしながらも、アヘン戦争で自国が中国と戦闘状態にあるので、中国から日本へ救援を願われても応えないようにという内容ではなからうかと述べたというのである。これを聞いた長崎奉行は、尋問の報告書とともに「日本国長崎御奉行様」と書かれた書簡を江戸へ送つたが、嚴重に秘したにもかかわ

らず漏洩してしまい、商売に携わる人物などの知るところとなるのである。

むろん高島も商人であり、アヘン戦争の影響により中国船が来航しなくなれば、乾物類の相場が高くなると考えたが、幸い天保十二年に三艘、翌十三年正月十一日に二艘が来航し、後者からの情報を入力する。すなわち、入港した二艘の乗務員は、清朝側のアヘン戦争への対応振りを述べたようだが、戦争により危険にさらされることを恐れ、夏に中国船が来た時に情報を得てから帰国したいと申し出たが、これを長崎奉行側は認めなかつた。中国船は、いつもの倍の食料を積み、三月には出帆した、という。

以後、高島は、正確な日時は欠くが天保十三年中に、前述したイギリス人から長崎奉行に内々に渡した封書が、同国に漂流した日本人七人のうち三人からのものである、という情報を入力する。内容は、イギリス人が日本のどこかに上陸した際に鉄砲で撃ち殺されたことを生存者が報告したところ、同国は中国を獲得した上は日本を攻め取ろうと考えている、というもので、同人の心中は察するに余りある。

高島はこの情報により、イギリスが中国との戦いに本腰を入れるとすれば、幕府も九州や北国の諸大名にも海防の手当を命じるであろうと推察するとともに、天保十三

年八月から鉛が高くなった原因を、諸家による火砲手当であると考えるのである。

また、天保十三年八月以降、アヘン戦争の顛末を述べた「オランダ別段風説書」の内容が長崎市中に漏洩したらしく、高島は同地の不穏な様子を伝える。そしてまた、日時は欠くが、アヘン戦争の手当のために川越藩が浦賀へ出張手当を仰せ付けられたとする情報を入手しているから、同人だけでなく全国の人々が、アヘン戦争に対する弊害が日本にも及ぶのではなからうかと考えたと思われる。

さらに高島は、長崎から天保十三年八月二十日に出され、これを転写し大坂から同二十九日に発信された書簡により、琉球にイギリス人が来航して乱暴をはたらき資財を奪ったが、かつて同地で恩義を受けたとして、これを返却したという情報を入手する。この書簡は、昨年渡来した中国船が、途中イギリス船に取り囲まれ蘇州に入港したことを記すとともに、幕府側がアヘン戦争に関し唐館に尋ねたところ、オランダ船からもたらされた情報と違うところはなかったとする。また、幕府から、九州十四ヶ国とともに、長崎にも薪水給与令を通達したことを伝える。

注目すべきは、この書簡に長崎の唐館の人物の談話が記されており、中国人の内情が垣間見えることである。す

なわち、自国の恥と思つて黙っていたが、同年夏に来航した中国船が話したので、もはや隠す必要もなからうと語り始めたという。イギリスとの戦争で政治向きが悪くなった清朝の親王が広東に出張したが、広東の人々が火砲に葉をぬつたため飛散し自国の士を損じ、大敗北を喫したという。

これに対して高島は、イギリス側が使用する新兵器ポンベンの威力に清朝人が大いに困っていることとともに、高島秋帆とおぼしき人物がボンベンを幕府に献上し、天保十二年江戸徳丸ヶ原で演習を行ったことであろう、江戸へ向かう途中、運んでいた荷物を伏見から大津あたりで見た者がいたことを伝えている。

天保十三年九月頃から、高島の耳には、アヘン戦争の影響とそれに対する幕府の対応振りが入ってきたようだが、これにより、同人は前述したイギリスへの漂流民の弁を考へ、幕府がイギリスとの関係を穩便に済ませようとしているのではなからうかと考察するのである。

高島は、この幕府の対応に連動して、町人たちの中で、武器製作関係者が忙しくなったことを肌で感じたようで、九月節句前後に、関西だけでなく九州、北国、南海の諸大名が所領の手当を命じられ、四海に面する大名たちの軍役手当が出来たとする。アヘン戦争により武器製作関係者の仕事が増え、潤うところがあつたわけだが、高島



をはじめとする京坂の諸商人にとつて、中国貿易が断絶することは死活問題であつたと考えられる。高島に耳には、天保十三年十二月までは負の因子となる情報もたらされたが、同月二十二日に朗報が飛び込んでくる。十二月に都合四艘の唐船が来航したことを知るのである。これにより高島は、アヘン戦争が貿易にさほど影響を及ぼさないのではなからうか、と樂觀視するが、手放して喜んだとは考えられない。大坂にもたらされたこの四艘の唐船の荷物は、例年よりも少なく、その理由を、異国の風聞が漏れないよう嚴重に取り調べたためであるとするのである。また、イギリス船が因州、但馬、若狭、紀州、房州に出現し、淀城主が泉州浦の固めを仰せつけられたこととともに、幕府が下田、羽田に新規に奉行を置いた目的を、廻船の取締まりのほか、「異国固メ」と的確に把握していたことから、同人の心情は察すべきである。

天保十四年になると、前年末に来航した中国船の積荷の入札が始まつたが、その値段が高値であるとして、高島は、その理由を次のように分析する。これまで中国船の荷物は、長崎で入札後すべて大坂に廻されていたのだが、この度江戸に新規に唐物荷物請負人ができ、三分の一の荷物が廻されたためであるという。また、通例の中国船は、入津時に荷物の明細書を長崎奉行に差し出し、その

後長崎会所の役人の手を経て早船で注進するのだが、この度は明細書が長崎奉行の手にあり、あわせて唐船四艘に嚴重な警固をつけたため、その内容が漏れてこないという。そのため荷物がいかなるものであるのか知ろうとして、長崎の商人たちの行つた涙ぐましい努力を伝えるのである。この唐船の積荷の入札が見込みより高くなつた。上方での唐、蘭の薬種が高くなつたことは致し方なかつたろう。もつとも、正月二十日頃大坂に入津した「唐船の積荷数」と分量が伝わつた、と高島は記しているから、長崎の商人をはじめ、のちにこれを把握するに至つたことは確かであろう。

このように、アヘン戦争は、日本が中国と貿易をするにあつて多大な影響を及ぼしたが、負の影響ばかりではなかつた。すなわち大塩平八郎の乱でいったん目が向けられた武事は、その後また緩みはじめたが、高島は、アヘン戦争が起きたことにより、再び軍備の増強が進んだことを歓迎するのである。

以後、高島がアヘン戦争について『青菰雑誌』に記するのは、天保十五年を待たねばならないが、そこでは、誤認はあるものの、高島は卓越した分析力を發揮する。すなわち、南京条約締結後に、清国ではイギリス人を殺害したため再び戦闘状態に入ったが、イギリスと清国との往復書簡を幕府が見て、イギリスに分があるとしたという。

また、外国では、無二念打ち払い令の政策を執る日本に對して、不仁の国であると言っていることを考慮し、幕府は薪水給与令に転じた、と高島は結論づけるのである。

以上のように、天保十五年まで、高島は、かなり正確なアヘン戦争にかかわる情報を入手し、考察を進めていったようである。天保十五年には、来航したオランダの商船、もしくは後述するオランダの日本開国使節からもたらされた、最新のアヘン戦争にかかわる情報を入手している。

(2) オランダ開国使節に関わる情報の入手とその分析  
高島は、天保十五年六月から七月に、オランダが侵略のために来航したとする長崎の風聞を伝え、自身はさらに、オランダがロシアの属国となつてゐるため、来航の発案はロシア側にあるとするのである。むろん、この長崎の人々や高島の考えは誤りであるわけだが、以後、三井の長崎店から京都店に送られた書付などを入手して、次第に来航状況が詳細に高島のもとに伝えられるようになる。

そして、このような出来事があつたかどうか今日確認できていないが、七月頃より伝わりはじめ八月に頻繁になつた風説として、オランダ使節が長崎に渡来する前に琉球に立ち寄つたときの状況を、高島は次のように述べる。日本側が異国船と見れば打払うか焼払うかで、外国人は大いに恐れ、日本は不仁の国風であると言つており、そ

のためオランダ国王が使者の船を日本に遣わしたのであると、オランダ人は琉球で述べたという。またオランダ側は、日本側が助言を聞きいれない場合本船を引取らねばならぬと申し、人質を置いていく代わりに琉球にしばらく滞在したいと述べたという。琉球側は返答を延ばし、薩摩藩に事情を報告し、薩摩は琉球へ多勢を差向け、幕府へ報告するに至る。これに對しての幕府の掛合は判らないとしながらも、オランダ人が琉球に兩人を人質として取られたことは確かで、これによりオランダ側の希望は叶えられた、と高島は述べるのである。また高島は、この琉球からの報告で、幕府側は事前にオランダの使節が渡来することを知つていたはずであると考ええるともに、世上の浮説もよくないことばかりであるとする。

高島のもとには、さらに七月から八月にかけて、使節を乗せてきたバレンバン号にかかわる情報もたらされたようであるが、その後、使節の檢視にあつた幕府の御徒目付松永定作より、報告書を与えられたことは、特筆すべき事項である。江戸から長崎に向かう途中、松永は御小人目付とともに、七月九日から十二日までのいずれかの日に高島邸を訪問したあと、再び江戸に帰る際にも訪問し、その際に報告書を手渡したのであつた。

この松永からもたらされた報告書以外に、御徒目付か御小人目付が差し出した報告書も入手しているから、バレン

ンバン号来航時における外聞を、高島はことごとく知りえたといつてよからう。それでも、関連の情報は収集し続け、長崎発の書簡の文面を入手し、オランダ船の渡来状況を、さらに詳細に知りえたようである。高島は、オランダ使節が持参した献貢品や「玉薬おろし并人別改」について述べ、幕府の対応ぶりを批判するに至っている。二三十年前から、オランダが長崎交易について無理非道を尽くしているが、長崎で起きたことは同地で処理するようにしていることが問題で、幕府の不正は外国に対して恥ずかしいと結んでいる。

この長崎発の書簡以後に、高島が入手したオランダ使節に関わる情報は、薩摩藩某より出た情報であった。すなわち、長崎奉行より厳令が出され、諸大名は戦争の支度までして、各城下の民衆もそのつもりでいたが、日がたつにしたがい、「思の外」でもないと感じるようになった、と高島は伝えている。

長崎における状況を再び高島は知ったのは、江戸の塾で学習している美濃人が、長崎に赴いていたと考えられる同じ塾の門人から、十一月十七日に聞いた情報による。

江戸に戻ってきた塾生は、オランダ船が来航し、長崎では容易ならざる状況にあるとともに、オランダから幕府に提出した書簡に六ヶ条の願いがあったとし、そのうちの二つが「大奥之美女を一人頂戴致度事」と「年々式万石

宛米頂戴致度事」で、その余のことも、交易に関わることであるとす。さらに、オランダは、提示した六ヶ条を日本側が許容しない場合、軍事行動に出るつもりであるとして、幕府内部でも、そうなれば国のためにならず、交易を許したらどうかとの意見が七割であるという。むろん、このような情報は機密であり、長崎の者は美濃の者に伝えるにあたって、内々にしてくれるよう述べたという。

この美濃人の情報を入手して、高島は、京都でも同様な話があるとしているが、のちに弘化三年、この長崎の者の弁に対して考察した記述から、同人の学問観が垣間見える。すなわち、実説はともかく、幕府が交易を許可してよいかどうか、林家と学問所に書付をつかわしたことに對して、儒者に外交問題を扱わせるなどもつての外であるとして、武威の衰えを感じているのである。また、高島は、武家の学問である儒学を承認していなかったと考えられるが、幕府の対応ぶりを公家同様の弱腰であると批判するとともに、学問の中心は京都であるといわんばかりの論を展開する。

さらに高島は、筑前博多から七月六日に出された書簡の内容を入手し、長崎での混乱ぶりを知る。オランダ人は「咬啗吧」に漂流した日本人八人をつれてきたが、日本側が一向に取り合わないの、立山役所に訴えたという。

そのため幕府は、九州の国々に「大早飛脚」で触れを出し、当時長崎警備の当番であった佐賀藩、休番であった福岡藩のほか、平戸、大村、唐津、嶋原、長州も長崎に出張したとする。また書簡は、来航したオランダ船の武器類についても伝えていたが、高島は、この長崎での騒動を、かなり冷静に受け止めている。しかし、一般民衆は、この度のオランダ船の来航をアヘン戦争と結びつけるとともに、イギリスが今にも日本を攻めに来ると考えており、これを高島は、侮蔑をもって眺めている。

以上のように、オランダ使節の来航に関して、冷静、否どちらかといえれば樂觀視していた高島であったが、天保十五年、長崎と取引のある京都の人物から情報もたらされ、来航したオランダ船をロシアのものと誤認するに至る。すなわち、日本は小国オランダとの交易は現今でも事足りているのに、この度大船で来航したことを、オランダがロシアの属国になっているためであるとし、さらには、来航船さえ世説でささやかれていたロシア船であるうと考えるのである。

むろん、このように考えるのは、同人をはじめとして京坂の人々の脳裏に、ロシアに対する嫌悪感があったためと思われる。高島は、文化以来のロシアと日本との関係を振り返っているが、それにしても、やはり関連情報が不足していたといわざるを得ない。次第に風聞が伝わっ

たものの、天保十五年七月段階では、オランダ船の来航騒動で九州の商人と取引できず、呉服屋が困ることになったが、幸い中国船三艘が入津し、京都市民も安心したとする身近な状況を記すに止まっている。また、前述した、オランダ人が日本の漂流民を連れてきたというのは誤りで、このたび来航した中国船が、同国へ漂流した阿波の者一人を連れてきたとして、情報が錯綜している様子うかがえるのである。この阿波の者は、アヘン戦争にフランスも参戦したことに関する情報をもたらしただうだが、高島はその内容を知るすべもなかったようである。

そうこうしているうちに、オランダ船は、十月いったん長崎を離れる。高島は、十二月上旬に「極密之風説」を入手したが、この時点でも、オランダ側が貿易量の増大と米の輸出を日本に要求したと考え、本来の目的である日本の開国については触れられていない。どうやら、オランダ使節に関して、前述の幕府御徒目付松永定作よりもたらされた以上の情報が、天保十五年の段階で高島のもとに入ってくることはなく、オランダが日本の小島四、五ヶ所を借り交易場としたい、などの風聞が飛び込んでくるに過ぎなかったようである。また、九月上旬からの風聞により、オランダの書簡には、先年より竹島や新潟洋で日本の米を交易していたが、一昨年より一粒も入手

できなくなつたので、日本から表立って数十万石を交易してくれよう頼む旨の内容が認められていたとしており、この時点では、オランダ使節の来航目的について全く知りえていない。十二月の時点で、ロシア船であるという考えは消えてはいたものの、オランダがロシアの属国であるとの考えは捨て切れず、ロシアの考えによりオランダが争いを起こすのではないかと危惧するのである。

### (3) 蝦夷地に関する情報の入手と検討

蝦夷地に特に事件らしいことも起きていない天保十五年八月中旬、松前西教寺の僧侶（象王のことであろう）が、讃岐の金比羅を参詣する途中訪問をうけ、知己を得たことで、同地への関心を深める。西教寺の僧侶は、水戸家が常陸から津軽までの東岸と松前七十里の海岸を残らず点検したのち、松前や秋田で注意を促したことを語り、同家について高島は評価するに至る。もつともこの僧侶は、あわせて、水戸侯が「ドンドロボンベン」を試し打ちして落ち度があったと述べているから、この高島の評価は、技術面を除く精神面に対してであったといえよう。また高島は、幕命により松前藩が信州真田家に表向き手伝いとして両三人を遣わしたことも、江戸屋敷にいる松前家の人物からの、松代から十町離れたところからも大音量で演習音が聞こえたとする風聞を聞かされ、

松代藩の砲術研究の先進性を感じ取つたものと思われる。恐らく幕府は、北の固めを強化するために、松代藩に命じて、松前藩の砲術水準を高めようと考えたのであろう。

天保十五年末、蝦夷地での異変に心動かされて高島が行なつた、ウルップに関する知識の総点検から、その蝦夷地観を垣間見ることができた。カラフトには、江戸から役人が交代でやってくる陣屋があるが、このカラフトから十六里のところにあるロシア領ウルップにロシア政府は官人を派し、文化年間から建造し始めた大城が、天保九年に完成したという。そしてこの大城に、蝦夷地で交易する日本商人たちは、日本を併呑しようと考えているのではなからうかと、不安を募らせているという。さらにロシアは、ウルップに十万騎の兵とともに兵船千五百艘を集結し、日本との国境の柵を潰したという。カラフトの役所は江戸へ早打で知らせたので、幕府は大いに驚き、東北諸藩に嚴重に海岸防備を命じ、幕府自体も諸役人を下そうと考えているという。

このような蝦夷地でのロシア人の戦闘行動については、天保十五年九月にも、松前より二百四、五里の「エドモ」というところで「夷人」が乱妨したので、松前家が防ぎに出たとしている。まさに開国後に発生するロシアとの領土問題を暗示するかのよう、「嗚呼竟二後年我朝之病ひならん歟」と述べるのである。

さらに高島は、弘化二年正月、再び松前にもどった西教寺の僧侶から、蝦夷地関係の情報を手紙によりもたらされる。松前城下より六十里ほどの所にある「トッホツケ」という湊に、ロシアの属国船が来て越年を乞い、日本側は許可して薪水や食料を与えたが、文化年間にも同じようにやってきて乱妨をはたらいたとして、松前側が警戒する様子を伝える。そして、幕府や松前藩が、この度も文化年間のロシアの行動を鑑み警戒していると述べているが、高島も同じ感慨を抱いたと考えられるのである。

(4) 天保十五年三月のフランス船の琉球来航

残念ながらこの件に関して、天保改革期において、高島は正確な事情を知りえていない。同年八月に長崎からの風聞がもたらされ、薩摩藩が琉球へ人を送ったことととも、薩摩藩から幕府に提出した文面を入手したようであるが、当初来航したフランス船と、長崎に来航したオランダ船とを、当時の人々が混同している様子を伝える。また同年十二月頃の風説として、「霜月極月」に起こった蝦夷地の一件を鑑み、琉球に二人を残し帰国したフランス船の再来航に備え、薩摩藩主は予定よりも早く帰国したことを高島は知るに至ったようだが、結局天保改革期においては事件らしい事件も起きないためか、以後新しい情報は入手できずにいるのである。

## 注と参考文献

- (1) 『青菰雜誌』第拾貳の九丁に「富小路通二条下ル俵屋町」、同第拾四の一丁には「富小路通押小路上ル町」とある。
- (2) 金杉英五郎『山陵の復古と精忠』（日本医事週報社、大正一五年九月）一四八〜一六七、二二三〜二二五頁。これによれば、高島が弟に譲った店は「木屋町四条上る所」にあったようである。
- (3) 前掲(2)には生年は記されているが、月日を欠いている。『青菰雜誌』第拾貳の七六丁に「予寛政四年壬子二月二生れ」とある記載から、月まで判明した。
- (4) 『国書総目録』、『国書人名辞典』には、山陵関係の著作として『諸陵考』（名古屋大学皇学館文庫）、天文関係のものとして『応元曆推歩考附説』（旧彰考館）、語学関係として『遠古登点譜』（国会図書館、岩瀬文庫、無窮会神習文庫）が掲載されている。
- (5) 前掲(2)の金杉著書。
- (6) 『青菰雜誌』第拾壹。
- (7) 『青菰雜誌』第拾四の三二丁。
- (8) 『青菰雜誌』第拾九の七〇丁。
- (9) 『青菰雜誌』第廿二の二五丁に知恩院行者として伴

豊前の名があり、同人は『青菰雜誌』には頻出する。

(10) 堤中納言の家臣の名が散見する。

(11) 尾張藩の長坂小七郎、神谷喜左衛門の名が見てとれる。

(12) 本稿で扱う松永定作などが見てとれる。

(13) 前掲(2)。

(14) 『青菰雜誌』第拾壹の六五丁。なお日本におけるアヘン戦争に関する情報収集については、小西四郎「阿片戦争の我が国に及ぼせる影響」(『駒沢史学』創刊号昭和二八年一月)など多くあるが、これらを概観した最新の論文に、岩下哲典「アヘン戦争情報の伝達と受容―天保一〇年から一三年まで―」(明治維新史学会編『明治維新と西洋国際社会』(明治維新史研究5)吉川弘文館、平成一一年二月)がある。文献については同論文を参照のこと。また天保改革期についても多くの文献があるが、近年の成果として、藤田覚「天保の改革」(吉川弘文館、平成元年四月)などがある。

(15) 『青菰雜誌』第拾壹の七〇丁。

(16) 『青菰雜誌』第拾壹の八一〜八三丁。

(17) 『青菰雜誌』第拾壹の八四丁。

(18) 『青菰雜誌』第拾壹の九一丁。

(19) 亀川正東『沖繩の英学』(研究社出版、昭和四七年七月、四三頁)は、「一八四二年―イギリス船一隻以

上来航。船名不明。」とのみ記している。

(20) 『青菰雜誌』第拾壹の九一〜九二丁。

(21) 武雄市の今泉家文書には、高島秋帆と江戸に同行した平山醇左衛門の書簡が残されている。

(22) 前掲(16)。

(23) 『青菰雜誌』第拾壹の九二丁。

(24) 『青菰雜誌』第拾壹の九五〜九六丁。

(25) 『青菰雜誌』第拾壹の九五丁。

(26) 『青菰雜誌』第拾壹の二三丁。

(27) 『青菰雜誌』第拾壹の二七丁。

(28) 『青菰雜誌』第拾壹の三〇丁。

(29) 『青菰雜誌』第拾壹の二〇丁。

(30) 『青菰雜誌』第拾壹の三一丁。

(31) 『青菰雜誌』第拾壹の五四丁。

(32) 『青菰雜誌』第拾三の二二丁。

(33) 『青菰雜誌』第拾三の二四丁。

(34) 『青菰雜誌』第拾三の二八丁。

(35) 『青菰雜誌』第拾三の二八丁。

(36) 『青菰雜誌』第拾四の四〇丁。

(37) 『青菰雜誌』第拾九の一〜四丁。

(38) アヘン戦争を考慮して幕府が打払令から薪水令へと転換したとするこれまでの定説について、前掲(14)の岩下論文は再検討の必要性を論じており、注目に値

する。

- (39) 『靑菰雜誌』 第拾九の一〇丁。
- (40) 『靑菰雜誌』 第拾九の三七丁。
- (41) 『靑菰雜誌』 第拾九の三八丁。
- (42) 『靑菰雜誌』 第拾七の三四丁。
- (43) 『靑菰雜誌』 第拾七の三四〜三七丁。
- (44) 山下重一「英艦サマラン号の琉球・長崎来航」(『続琉球・沖繩史研究序説』御茶の水書房、平成一六年一月) から考えると、この高島という琉球に来航したオランダ船とは、恐らく八重山に来航した英船サマラン号のことと考えられる。
- (45) 『靑菰雜誌』 第拾七の三七〜三八丁。
- (46) 後に登場する松前西教寺の象王のことと考えられる。
- (47) 『靑菰雜誌』 第拾七の四〇〜六九丁。
- (48) 『靑菰雜誌』 第拾八の七二丁、同第拾九の十丁。
- (49) 『靑菰雜誌』 第拾八の一〜七丁。
- (50) 『靑菰雜誌』 第拾八の七丁。
- (51) 『靑菰雜誌』 第拾八の七〜一七丁。
- (52) 『靑菰雜誌』 第拾八の二八丁。
- (53) 『靑菰雜誌』 第拾八の二八〜二九丁。
- (54) 『靑菰雜誌』 第拾八の三三丁。
- (55) 『靑菰雜誌』 第拾八の三七〜三八丁。
- (56) 『靑菰雜誌』 第拾八の四一丁。

- (57) 『靑菰雜誌』 第拾八の四三丁。
- (58) 『靑菰雜誌』 第拾九の九〜一〇丁。
- (59) 前掲(57)。
- (60) 『靑菰雜誌』 第拾八の七二丁。
- (61) 『靑菰雜誌』 第拾九の一〇丁。
- (62) 『靑菰雜誌』 第拾九の七〇丁。
- (63) 『靑菰雜誌』 第拾九の一〇丁。
- (64) 『靑菰雜誌』 第拾九の一四丁。
- (65) 『靑菰雜誌』 第拾九の一丁。
- (66) 『靑菰雜誌』 第拾九の一四丁。
- (67) 次の論文、著作などを参照のこと。
  - 幸田成友「和蘭王キルレム二世の書翰」(『幸田成友著作集』第四卷、中央公論社、昭和四七年二月)
  - 森岡美子「ウイレム二世開国勧告に関するオランダ側の事情について―鎖国日本に対して寄与すべきオランダの役割―」(『史学雑誌』第八四編第一号、昭和五〇年一月)
  - 同「弘化年間における日蘭国書往復について―幕府側の諸問題―」(『日本歴史』第三〇一号、昭和四八年六月)
  - 同「弘化年間における日蘭国書往復について―長崎奉行伊沢美作守の任務―」(『長崎談叢』第五四輯、昭和四八年二月)



永積洋子「通商の国から通信の国へ—オランダの開国勸告の意義—」(『日本歴史』第四五八号、昭和六一年六月)

岩下哲典「再検討、オランダ軍艦の長崎入津と国王親書受領一件—新史料「異国船一件」より—」(片桐一男編『日蘭交流史 その人・物・情報』思文閣出版、平成一四年一二月)

田保橋潔『増訂 近代日本外国関係史』(復刻版、原書房、昭和五二年一月)

小暮実徳訳『シェイス オランダ日本開国論』(雄松堂出版、平成一六年八月)。

(68) 『青菰雜誌』第拾九の二二丁。

(69) 『青菰雜誌』第貳拾、第廿壹。

(70) 『青菰雜誌』第拾九の一〇丁。この僧侶は『青菰雜誌』第廿三の七〇丁に登場する「東派願徒松前西教寺象王」であると考えられる。高島は寺名を「西來寺」とも「西教寺」とも記すが、松前に現存する西教寺が正しいと考えられる。

(71) 『青菰雜誌』第拾九の一丁。

(72) 『青菰雜誌』第拾九の六九〜七〇丁。

(73) 『青菰雜誌』第貳拾の二丁。

(74) 「従大和下状」(琉球王国評定所文書編纂委員会編『琉球王国評定所文書』第二卷、浦添市教育委員会、

平成元年一月)にその詳細が述べられている。

(75) 『青菰雜誌』第拾九の一〇丁。

(76) 『青菰雜誌』第拾九の一三丁。

(77) 『青菰雜誌』第拾九の一四丁。

(78) 『青菰雜誌』第拾九の六八丁。

(79) 『青菰雜誌』第拾九の七二丁。

(80) 『青菰雜誌』第貳拾の三丁。

なお本稿は、宇津純氏をはじめとして国立国会図書館の職員の方々により、多大の校閲をいただきました。末筆ながら深く御礼申しあげます。

(どい やすひろ 国士館大学政経学部非常勤講師)